

---

# 神々の使徒

九條佐京

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神々の使徒

### 【Nコード】

N5188W

### 【作者名】

九條佐京

### 【あらすじ】

「この世界は“止まった”よ、君のおかげで……ね」

偶然から始まった、神から使わされた『使徒』との冒険ファンタジー。

世界を元に戻すには、

世界中に散らばった『使徒』を集めよ。

【ネイチャー】…太陽、月、

星、空、雲、風、赤星、夕星、火、水、大地、植物

【ジョブ】：執行人、錬金術師、賢者、魔導士、料理人、狩人、騎士、薬師、神父、道化師、吟遊詩人、学者、侍、吸血鬼、盗賊

個性豊かな登場人物達と

共に、異世界を旅しよう！！

ブローグ？

それは、単なる偶然だったのだ。そう、偶然。

でもまさか悪い方の偶然が起こるとは……。

「やばいんじゃないかな……これ」

紫苑は目の前の空間を仰ぎ見てつぶやいた。  
シオン

長い廊下の大理石で造られた白い壁に、突如ぽっかりあいた穴。

高さは約二メートルほど、寸分の狂いも無い直線の切り口は、この穴が人工的に造られた物だとわかる。

それもそのはず、先ほどまで穴には扉がはめ込まれていたのだから。

紫苑は視線をまっすぐに戻す。

扉の向こうは、深淵なる闇が息を潜めていた。  
廊下にはちゃんと電灯がついているのだが、その光は一切扉の向こう側には届かない。

まるで扉を挟んで光と闇が反発しあっているようだ。

くつきりと分かれた明暗の境目を見て、紫苑の背筋を冷たいものが駆け抜けた。

(こっちは……本当に、開けるべき所じゃ無かったんだ……)

紫苑のこめかみを、微温い汗がつうつと伝う。

何故こんなことになってしまったのか……。  
それを語るには、最初から始めた方がわかりやすいだろう。

ことの発端は三月の下旬。

じつらかな春の昼下がりのことだった。

## ブローグ？

ご存知だろうか？

東京都の郊外に、小さな森が存在することを。

高いビル群が連なる東京の中心部から少し離れた所に、突如青々と茂る森が現れる。

ちょうど東京ドーム十個分に相当する面積を持つ森は、国有の物では無い。

一個人が管理している、れっきとした私有地なのである。

森の周りは見上げるほど高い鉄の柵によってぐるりと囲まれている。その柵の一カ所だけ、東京の中心部の方角に、門がついていた。

鉄柵の真ん中あたりから四角く切ったような鉄の門は、まるで侵入

してくれと言わんばかりに開け放たれている。

門の横には、人の目の高さの位置に、表札らしき物が針金で門にぐるぐるに巻きつけられていた。

表札には、綺麗な楷書体でこう書かれていた。

『灯馬家 - - - - 封使館』



## 1章・封使館？

「ここで、あつてるよな？」

東京都、ニシアラホシ西新星駅。

人の波にもみくちゃにされて、その渦にのまれながら紫苑はどうにか改札をくぐった。

邪魔にならないよう、改札の近くにある券売機の横の壁にもたれかかり一息ついた。

初めての東京。

予想していたより、遥かに人が多い。

時間帯はお昼時で、通勤時刻では無いにも関わらず、駅は行き交う人でごった返している。

まるで、大きな洗濯機の中に沢山の人間が放り込まれて洗われているみたいだ。

どこを見ても人、人、人。

様々な人が、様々な目的と意志を持って、様々な方向に移動している。

そのうねる人の波を見ているだけで、少し気分が悪くなった。

紫苑は床をじっと見つめることにした。

左腕の真新しい腕時計に視線を落とすと、ハアとため息をついた。

アナログ式の時計は、一時四十分を差していた。

(さすがに二十分前は早すぎたかな……)

紫苑は少し後悔する。

多くの人々が行き交う西新屋駅の隅っこで、紫苑と彼の足下に置かれた大きな鞆は、完全に取り残されていた。

## 1章・封使館？

五分ほど経って、人混みはだんだんおさまってきた。

おさまったとは言っても、ほんの少しに過ぎない。

だが、改札の正面に位置している外へ通じる通路から、微かに吹き込んでくる風が頬を撫でる感覚に、息苦しさは解消された。

北海道で育った紫苑にとって、人混みの中の息苦しさなどは、夏祭りの時ぐらいにしか感じることは無い。

しかし、西新星駅は東京の中でもさほど主要な駅では無いが、それでも北海道のどの駅より人が多い。

(これから、こんなトコで暮らすのか……)

紫苑は、沈鬱な面もちで肺の中の空気を吐き出した。

その時、人混みが少しざわついたのを紫苑は感じた。

「ねえ詩織。

あの人、格好よくない？」

「あつ！格好いいかも」

左耳が女性の声を聞きつけた。

何事かと顔を上げると、券売機で切符を購入している女子高生の二人組が目に入る。

セーラー服に真紅のスカーフ。プリーツが綺麗についている紺のスカート姿。

肩にかけられたスクールバックには、最近若い女性の間で流行っている『ニヤパンダ』というニヒルな微笑みを浮かべるパンダのお揃いのストラップが、チャリチャリと揺れている。

券売機の前の荷物置きのような銀の台に立てかけられている細い棒は、おそらくラクロスのものであろう。

「でも、杏里彼氏いるくせに。もしかして浮気〜？」

「違ってる!」

ちよっと、格好いいなって思っただけ!」

「へえ〜……」

意味ありげな笑みを浮かべた少女は、詩織シオリというのだろう。

茶色い短い髪が、微かな風に揺れている姿はまさに、スポーツ少女だ。

そしてもう一方の、黒髪を後ろで結び、ポニーテールにした少女・

……杏里アンリは、詩織の肩を小さく叩いた。

「本当だつて!」

「わかってるよお。

でも、本当に格好いいよね。

執事さんみたい」

そう言って詩織は肩越しに後ろをチラリと見た。

紫苑も少し興味がわいて、詩織の視線の先に自分の顔を移動させる。

（わぁ………………。本当だ…………）

彼女の視線の先にいたのは、四番出口の通路から出てくる男性だった。

## 1章・封使館？

スラリとした高い身長に、その体から伸びる手足も細い。似合う人は数少ない燕尾服を、まるで私服のようにバツチリ着こなしている。

その完璧な体の上には、これまた完璧な顔があった。

黒くさらさらとした髪に、涼やかな碧い瞳。

まるで深海のように深い碧色には、見る者をグツと引き込ませる力があるようだ。

そして漆黒の髪に対比する、蠟のように白い肌。

色素の少ない、白く薄い唇。

スツと通った鼻筋。

それら全てがお互いの美しさを損ねること無く、完璧なる調和を保っている。

それは、まるで、神話の世界から抜け出してきた、神のよう。

紫苑はその男性が自分と同じ人間だということさえも疑っていた。

確かに執事のような格好だ。  
コスプレなのか、それとも……。

紫苑の思考は、隣で切符を買い終えて男性に見とれている二人の女子高生の声に中断させられた。

「あの人、誰か探してるみたいだよ？」

スポーツ少女、詩織が言う。

執事はキョロキョロと辺りを見回している。  
その姿は落ち着いていて、混み合う駅の改札前だろうが、とても絵になった。

不意に執事がこちらを向いた。

ばちっ！！



目があった瞬間、紫苑は電流が走ったかと思った。  
思わずシパシパさせるまぶたの裏に、チカチカと光が瞬いて見える。

(うえっ！？なんだなんだ！？)

今までに体験したことの無い感覚に、紫苑の心は軽いパニックを起  
こしていた。

頭を抱えて、その場所にしゃがみ込む。  
幸いなことに再びまばらに増えてきた人のおかげで、紫苑の姿は、  
ほとんど隠れていることだろう。

券売機に近づいたスーツ姿の中年男性が、しゃがみ込む紫苑に怪訝  
そうな顔を向けるが、紫苑はもちろん気づかない。

(なんだあれ、なんだあれ……)

余裕無く心の中で復唱し続ける紫苑の耳に、例の女子高生の声が届く。

彼女達は執事のことをずっと観察していたようだ。

「あっ!!」

杏里の声が、小さく跳ねる。

「こっち、こっち来るよ!？」

ど、どどするっ!？」

詩織の余裕無い声が続いて聞こえる。

まるで、人気絶頂のアイドルを見かけた時のようだ。

紫苑は少し顔を上げて目の前を窺<sup>うかが</sup>う。

-  
-  
-  
-  
-  
コツ、  
コツ  
-  
-  
-  
-  
-  
。

人の波の隙間から、誰かが近づいて来る靴音がした。

## 1章・封使館？

(はっ！？こっち来るって！)

紫苑の頭はオーバーヒート寸前だった。

その原因は美しい男性が近づいて来るからと言う訳では無い。

(いちゃもんつけられたらどうしよう……！！)

紫苑は小心者だった。

それは小さい頃からの特徴でもあった。

昔から他人と接することが苦手だった紫苑は、幼稚園に通うことを拒み、小学校でも友達らしい友達はできなかった。

休み時間は一人で過ごし、できるだけクラスメートとは関わらないようにしてきたのだ。

そんな紫苑は、中学校に上がるとイジメの対象になっていた。両親にもそのことを言い出せなかった小心者の紫苑は、祖父である源一郎に相談をしていた。

それを聞いた源一郎が提案したのは、高校を東京で過ごすことだった。

北海道は面積が広いために、高校も大体中学校の顔ぶれが揃ってし

まう。

全くの新天地で、自分を変えてみてはどうかという訳だ。

紫苑は悩んだ末に、東京に行く決心をして、東京に住む源一郎の家に居候することになった。

そして、今――――。

早くも紫苑はその決心を後悔していた。

徐々に足音は近づいて来る。

人混みの間から執事がスツと現れた時、紫苑の心臓は止まりそうになった。

周りの通行人達の視線が、紫苑と執事に向けられている。無論、二人の女子高生も例外では無い。

冷やかに突き刺さる視線に、紫苑はガチガチに凍りつく。

執事は紫苑の目の前で立ち止まると、ふんわりとした笑顔で微笑んだ。

瞬間的に紫苑の心から、冷え冷えとしていたものが、溶け出す。彼の笑顔は太陽だった。

執事の薄い唇が開く。

## 1章・封使館？

「失礼ですが、灯馬紫苑様でしょうか？」

ハーブのように心地よく響くその声が、紫苑の名を紡いだ。

紫苑は目の前の美形執事が自分の名前を呼んだことなんて想像もつかない。

自分を見つめる碧の瞳を、しゃがみ込んだままポカンと見つめていた。

紫苑のその反応を見て、執事は優雅に腰を折って一礼した。

「私、灯馬家にお仕えしている執事で、相模サガミと申します」

「僕は、灯馬紫苑といいます」

相模と名乗った執事に、紫苑は掠れた声で応じる。

行き交う通行人の女性からは熱い視線を、男性からは羨み視線うらやの対象となっているのは自分だということに知らん顔しているのか、それとも気づいていないのか（おそらく後者だろうが……）、相模は笑顔で会話を続ける。

「お待たせしてしまっただようで……まことに申し訳ございません」

九十度近く深々と頭を下げる相模に、紫苑は戸惑った。周りの人々の目には、紫苑は執事を叱っている主人のように映っていることだろう。

「いやっ！あの……相模さん！　　お願いですから顔を上げて下さい」

周囲を落ち着きなくキョロキョロと見回しながら、手をぶんぶんと振る紫苑の姿は、不審だったに違いないが、そんなことを構ってはいらなかった。

相模はゆっくりと頭を上げる。

「長旅でさぞかしお疲れでしょう。どうぞ、こちらへ。車を待たせてありますので」

相模は紫苑の足元に置かれた大きなボストンバックをスツと持ち上げた。



「あつ、いいです！  
自分で持つて行きます!!」

慌てて紫苑は相模の手から鞆を奪い返そうとするが、伸ばした手をふいっとかわされた。

紫苑が驚いて相模を見上げると、碧色の瞳がすぐ近くにあって心臓が跳ねる。

「紫苑様、これが私の仕事なのです。

……持たせて頂けませんか？」

至近距離で微笑まれて、紫苑の体から力が抜ける。

(反則だろ……あの顔)

背筋をピンと伸ばして前を歩く自分より高い背中を見ながら、少し口を尖らせたのだった。

## 1章・封使館？

木立の中の舗装された道路を、二頭立ての馬車がゆっくりと駆けていく。

紫苑は小窓から顔を覗かせた。聞こえるのは小鳥の囀り、風が木々の隙間を縫うように過ぎ行く時の木の葉がざわつく音、そして規則正しい蹄鉄の音。

深緑の若葉の潤いを纏った風が、紫苑の前髪を揺らす。

「紫苑様、そのように身を乗り出されては危ないですよ」

聞こえてきた優しくたしなめるような声に紫苑は窓から首を引っ込めた。

御者台から、相模が微笑みながら紫苑を見つめていた。

「すみません」

シユンとして紫苑が大人しく座り直すと、相模はフツと目を細める。

「馬車に乗るのは初めてですか？」

問いかけられた質問に、紫苑は頷いた。

「乗るどころか……見るのも初めてです」

四番出口の通路を抜けた先は、ちよつとしたパニックになっていた。人々は目を皿のように大きく見開いて、目の前の『それ』を凝視している。

いつもならば、タクシーなどが客待ちをするために駐車しているであろうロータリーには、見慣れ無いものがいた。

「………馬車？」

紫苑から呆れたような驚いたような声が漏れた。

四番出口のまん前、ロータリーの緩やかなカーブになっている所には、おとぎ話や絵本の中でお目にかかれない馬車が、さも当たり前のように停まっていた。

「はい」

それを肯定する、あっさりした相模の声に、紫苑は悪寒を感じた。嫌な予感がしたのだ。

当たらないでくれと心の中で祈りながら、紫苑は聞いてみる。

「相模………さん」

「はい」

「あの馬車ってさ、もしかして………？」

「灯馬家の物でございませす」

紫苑はがっくりと肩を落とす。車って……馬車だったのか。ていうか、何で馬車なんか持つてるんだよ！

激しい無言のツツコミは、相模の声に中断される。

「さあ、紫苑様。参りましょうか」

「えっ！」

「何を驚くことがあるのですか？さあ、こちらへ」

相模は躊躇なく馬車へと近づいて行く。

遠巻きに眺めていた野次馬が、ヒソヒソと会話をしているのが紫苑の耳に入ってきた。

「馬車、あの人の物なのかな？

すっごい合うね。なんだか王子様みたい」

「執事……？どつかの国の貴族の物かなんかなのか？

金持ちにしか出来ないよなあ」

「さっきあの執事さん、あの少年に話しかけてたぞ。

財閥の御曹司とか……か？

見えないけど」

## 1章・封使館？

(ええ………っ！！僕っ！？)

紫苑は周りを見回すと、大半の注目が自分であることに気がついた  
(もちろん、相模に見とれる女性も少なくはない)。

紫苑の心臓は限界を訴えてかけていた。

薄い胸を突き破って、今にも飛び出してきそうだ。

紫苑は、助けを求めるように相模を見る。

相模は紫苑の荷物を馬車に積み込むと、扉を開けて一言。

「どうぞ、紫苑様」

うやうやしく礼までする。

それが、野次馬のヒソヒソ話に火をつけた。

「様”だつて！」

「うわぁ………いいなあ！」

「そんなに凄い人なのか…」

紫苑はカァツと頬が熱くなるのを感じた。

(違う違う！違うんだって！！)

恥ずかしさのあまり、紫苑は相模が開けてくれた馬車の中にダッシユで飛び乗った。

相模が扉を閉める前に、小声で叫ぶ。

「早く出して下さい！」

答えの代わりに相模は笑みを返し、ひらりと御者台に飛び乗る。

「はあっ！！」

勇ましいかけ声と共に、相模は二頭の馬達に手綱で合図を送った。馬車はゆっくりと走り出し、紫苑はハアツと息を吐き出す。

一度熱くなった顔が熱を失うまで、ゆうに五分は時間を要したのだ。った。

「そうでしたか。

それはそれは、早く慣れて頂かないと……」

相模の納得したような声が、御者台から聞こえてくる。慣れるって……馬車に？

中世ヨーロッパでもあるまいし。

そう紫苑は思ったが、口には出さない。

代わりに先ほどから気になっている、あることを尋ねた。

「あの……相模さん？」

「なんででしょう」

「封使館の敷地は確か、さっき通った門からでしたよね？」

「左様でございます」

「門を通ってから五分は経ってると思うんですけど……。  
その、屋敷はまだなんですか？」

「ああ、そのことでございますか」

相模がまた納得したように言った。

「この封使館及びその周辺の敷地面積は、東京ドーム約十個分に相当すると言われておりますから……」

「ええっ!？」

封使館が広い敷地を持っているのは知っていたが、まさかそんなに広いとは思っていなかった。

「そろそろ見えてくる頃なのですが……。  
おっと、見えてまいりましたよ」

それを聞いて、紫苑は窓から顔を出す。

「うわぁ……」

青々とした木々の中に、白い建物が建っている。  
どんだん大きくなるその姿に、紫苑の胸は高鳴った。



## 1章・同居人？

緩やかに減速して、馬車は止まった。

重力を全く感じさせず、相模は馬車からふわりと飛び降りる。

窓から屋敷を見上げている紫苑に微笑みかけ、馬車の扉を開けた。

「あ、ありがとうございます」

慣れない行為をさも当たり前のようにする相模に、紫苑はぎこちな  
い笑みを浮かべて馬車を降りた。

「うわぁ……………」

紫苑は目の前の屋敷を仰ぎ見てみる。

真っ白な外壁に絡みつくように、屋敷の下部には深緑色の生命力を  
感じさせるツタが上へ上へと伸びている。

屋敷は三階構造になっているらしく、窓は外壁に三段並んでいた。

その数は、約二十個ほど。

一見こぢんまりしたホテルのようだ。

屋根の色はコバルトブルー！

その上には小さな窓がついた塔のようなものが二つついている。

右の塔の先端部分に銀色の綺麗な風見鶏があり、時折吹く風にキィ  
キィと音を立てて回っていた。

舗装された道路の正面の大きな木製の扉は、古びているが、どこか  
荘厳さが感じられる。

「どうなさいました？」

荷物を降ろした相模が背後から近づいてきた。

「綺麗なお屋敷ですね」

「ええ。源一郎様が大切になさっている屋敷ですから」

自慢気な顔で答える相模は、やはり美形だったが、どこか庶民風の秀囲気が漂って馴染みやすかった。

「うん、わかるよ」

紫苑の言葉に、相模は一瞬キョトンとしたが、すぐに先ほどまでより深い笑顔になった。

その笑顔の意味を知りたくて、紫苑が相模の顔を見上げた。

「ああ、申し訳ございません」

相模は少し目を細める。

実に楽しそうな表情をする相模は口角を少しだけ引き上げた。

「紫苑様が、私に対して初めて敬語ではなくなったので……  
嬉しかったのです」

「へ？」

紫苑はぽかんと口を開ける。

「どうか、これからは私に対して敬語をお遣いにならないで下さい」

「は、いや……うん……」

その言葉に、相模は満足そうに笑った。

「では、参りましょうか」

「うん……」

今日知り合ったばかりの人に対しては使い慣れないタメ口に戸惑いながらも、紫苑が両手で精一杯持ってきたポストンバックを片手で持って前を歩いていく相模の背中について行った。

## 1章・同居人？

門の前に着くと、中から少年が出てきた。

紫苑を見上げてキョトンとする少年は、紫苑の腰くらいまでしか身長がない。

淡い金色のふんわりした髪に、ハワイの海のように透き通ったセルリアンブルーの瞳。

おとぎの国の王子様なんだよ、と言われても、十分納得がいくほどにかわいらしい。

「あれえ？お兄ちゃん、誰？」

十歳くらいの少年は、上目遣いで紫苑を見つめた。

紫苑がなんと言おうか迷っていると、隣に立っていた相模が口を開いた。

「ルナセル様。

この方は本日より、この封使館にお住まいになる灯馬紫苑様でございます」

へえ………とつぶやくと、ルナセルと呼ばれた少年は眩しいくらいの笑顔で紫苑を見上げた。

「トーマってことは、源一郎の言ってた人だよな？

初めまして、僕はルナセル。

これからよろしくね、紫苑お兄ちゃん！」

まだ幼い発音の仕方を微笑ましく思いながら、紫苑は差し出された

小さくて白い手を優しく握りかえした。

「こちらこそ、よろしく。  
ルナセル」

そんな様子を笑顔で見っていた相模が声をかけてくる。

「紫苑様、そろそろ参りましょう。  
ずっと馬車の中で、さぞお疲れでしょうから」

「そうだね」

ルナセルは頷くと、握っていた手をそつと離れた。

「じゃあ、また後で会おうね、お兄ちゃん。  
あっそうだ………相模」

「はい、なんでしょう」

「僕、ちよつと森で遊んでくるよ。  
晩ご飯までには帰るから！  
じゃっ！」

言うが早いか、ルナセルは紫苑達が来た道を元気よく駆けていった。

「かしこまりました。  
どうかお気をつけて行ってらっしゃいませ」

相模が腰を折って礼をするが、ルナセルの姿は木々に紛れて見えなくなっていた。

(足の速い子だなあ……)  
「相模さん、今の子は？」

「ルナセル様のことでしょうか？」  
「うん」

「あの方は、この封使館にずっとお住まいになっていらっしやるのです。」

ちなみに、後お二方がこの屋敷にお住みですが、どちらの方も灯馬家の血縁の方ではございません」

ふむふむと納得する紫苑を横目に、相模は真鍮製の取っ手を握り引いた。

巨大な大邸宅にあるような重そうな扉を、片手で開ける相模。  
その細い体のどこにそんな力があるのか。

紫苑はそんなことを考えていたが、屋敷の中の様子に目を奪われた。

## 1章・同居人？

金糸で周りを縁取られた真紅の絨毯が一面に敷かれたエントランスホール。

その奥には新内閣が成立した時に並ぶ大階段のような階段があり、途中から二手に湾曲して分かれている。

頭上を見上げると、巨大なシャンデリアがあり、暖かな色味の光がホールを満たしている。

階段の踊場に飾られている絵画は、中世ヨーロッパ風のタッチで沢山の人が描かれている。

「紫苑様のお部屋にご案内致します」

紫苑は色んな物を見ようとして、キョロキョロしながら相模の後に続いた。

絨毯は足がぎりぎり沈み込まない程度にふかふかで、二人の足音を吸収するため、エントランスホールはとても静かだった。

紫苑の部屋と案内されたのは、三階にある階段を上がってすぐのそこそ広い部屋だった。

シングルベッドに本棚、窓際に置かれた木製の机と椅子。

ももとは客用であつたらしいその部屋には、トイレと風呂が完備されていた。

「では、夕食の際に参りますので、それまでごゆっくりなさって下さい」

ポストンバックを机の上に置くと、相模は丁寧に頭を下げた部屋を後にした。

一人取り残された部屋で、紫苑はとりあえずベッドに仰向けに寝転んだ。

家のベッドよりもふかふかで、体を包み込んでくれるその感覚に、紫苑は体を預けた。

目を閉じると、余程疲れていたのか、眠気がどつと襲ってきて紫苑は睡魔に逆らわず、そのまま眠りに落ちたのだった。



## 1章・同居人？

「……………紫苑様」

意識の遥か彼方から、弦楽器のように落ち着いた響きをもつ声が響いてきた。

その声の心地よさに、紫苑は寝返りをうちながら鼻から大きく息を吐いた。

「……………紫苑様。」

夕食の支度が整いました」

ぼんやりと目を開けると、微笑んだ相模の顔が間近にあるのに気がついた。

「っ！……………うわあ！」

ベッドから跳ね起きると、相模は丁寧に一礼した。

「おはようございます。」

よくお休みになられましたか？」

「あ、うん」

紫苑が頷くと相模は満足そうに笑みをたたえる。

「夕食の時間となりましたので、失礼ながら起こさせて頂きました」

「今何時？」

大きなあくびをしながら尋ねると、時計を見ることなく相模は答える。

「六時三十一分です」

屋敷に着いたのがちょうど三時頃。

ゆうに三時間は眠っていたことになる。

紫苑は眠い目をこすりながら、相模に言う。

「行こうか」

「はい」

そうして二人は部屋を後にした。

## 1章・同居人？

相模に付いて食堂に向かう時にわかったことだが、封使館には一合館・二号館・三号館が存在し、門から見えていた部分は一合館、その裏に渡り廊下で二階部分が繋がった二号館、三号館があるのだ。食堂は、その二号館の二階にあった。

「どござ」

またもや相模が扉をサツと開けてくれる。

食堂の中に置かれた細長いテーブルには、三人の人物が座っていた。

一人目、扉に一番近い場所に座っている人物。

オレンジがかかった茶色く短い髪に、輝く金色の瞳。

肌も少し小麦色に日焼けしていて、健康的な印象を与える。

チュニツク………と云うのだろうか、カーキ色の服を着たその下には、たくましい筋肉がうかがえる。

二人目、扉から一番奥に座っている人物。

背中のまん中まで伸びたさらさらのまつすぐな銀の髪に、同色の瞳。肌は雪のように白く透き通っている。

ほっそりとした美しい腕が、灰色を帯びたローブのような服からぞいでいる。

三人目、テーブルのまん中付近に座った人物。

……それは、

「紫苑お兄ちゃん！」

パアツと顔を輝かせて紫苑に手を振るルナセルだった。

茶髪の青年がそれを聞いて、紫苑に向き直る。

「紫苑………?」

そうか、お前が源一郎の言ってた奴か」

そこまで言つと青年は、ニコツと紫苑に笑いかけた。  
まるで太陽のような陽気な笑顔だ。

「俺はザック。よろしくな」

「あ、よ、よろしく」

「そんなに堅くなるなよ。」

ほら、アローデイス、お前も挨拶くらいしとけよ」

ザックは銀髪の青年を振り返つて言う。

アローデイスと呼ばれた青年は、銀色の瞳で紫苑を見据えた。

「私は、アローデイスだ。」

お前が灯馬の血を引く者か?」

「へっ!? あ………はあ………」

なんとも気のない返事に、アローデイスはため息をつく。

相模がスツと紫苑の横に移動して、紫苑を席へと案内した。

ルナセルと向かい合う位置、ザックとアローデイスのまん中に紫苑は座り、食事が始まった。

「お兄ちゃんはどうな食べ物が好き?」

「紫苑はどこから来たんだ？」

ルナセルとザックの質問攻めにあい、紫苑は食事の味もわからないほどに緊張して、夕食は終わった。

## 1章・同居人？

「疲れたあ……………」

部屋に戻るなり肩をがっくり落とした紫苑の姿を見て、相模がくすくすと笑う。

食事の間、部屋の隅に控えていた相模には会話の内容が筒抜けだった。

矢継ぎ早に繰り出されるザックとルナセルの質問に、紫苑はまともに答えることができなかったのだ。

「笑わないでよ……………」

じとりと紫苑が相模を見つめると、その視線を感じた相模は軽く頭を下げた。

「申し訳ございません」

だがその顔には、依然として笑みが浮かんでいる。

「あの二人……………ザックと、アローデイスだけ？  
が、さっき言ってた同居人？」

「左様でございます」

相模は笑顔で頷く。

紫苑はさつきから気になっていることを聞いてみた。

「ねえ、おじいちゃんは？」

「源一郎様でございますか？」

紫苑は肯定の意味を込めてコクリと頷いた。

「源一郎様は、この屋敷にはいらっしやいませんかよ」

「ええっ!!!??」

「今はお仕事のご関係でイギリスにいつていらっしやいます  
ご帰国は一ヶ月後です」

衝撃の言葉が飛び出す。

ということとは、だ………。

「僕は、あの三人と一ヶ月の間おじいちゃん無しに過ごすってこと  
?」

「そうなりますね」

「無理」

「なにが無理なんですか？」

真顔で見つめてくる相模の顔は、一般庶民である紫苑には衝撃が強すぎる。

ほんの少し視線を斜め下にずらして答えた。

「だって、今日初めて会った人達といきなり同居で、しかも頼りに  
してたおじいちゃんがないなんて………無理だよ」

「お三方とも、紫苑様には好意を抱いておられますよ」

「.....」

黙りこくる紫苑に、相模は笑顔を崩さないまま、とある提案をした。

「紫苑様」

「？」

「屋敷の中を気分転換に散策なさってはいかがでしょう？」

キョトンとする紫苑に、相模は続ける。

「今日から三年間、紫苑様の家になる訳ですから。  
私をご案内致しますよ？」

「それいいね。うん、行こう」

少しだけ笑顔になった紫苑に、相模は部屋の扉を開けた。



## 1章・同居人？

「ここが応接室です。  
二十人まで収容が可能なので、ちょっとしたパーティーならばこ  
で行われます」

三号館の一階を案内しながら、相模が説明をしていく。  
いつもの相模が前を歩き、紫苑が後ろを歩くという構図ではなく、  
紫苑が気になる所をふらふら歩き、相模が後ろから説明を加えると  
いう感じだ。

「へえ……」

相模の質問を聞きながら、紫苑は微かに頷く。  
実際に歩いてみると封使館は想像以上に広く、一人ならば迷子にな  
る自信が紫苑にはある。

今までに見た中では、ホールが二つに応接間が四つ、使用人の控え  
室、厨房、食堂、図書室、遊戯室が各一つづつ。  
そして客間に至っては数十の部屋がそうであった。

「一通りは説明が終わりましたが……如何なさいますか？」

相模の質問に、紫苑は首を傾げた。

「え？まだ残ってるよ？……ほら」

紫苑が指差した先には、廊下の突き当たりの壁の先に地下へと続い  
ているであろう階段があった。

相模をうかがうと、端正な顔が少し焦りの色を帯びていた。

「いえ、紫苑様……………」

「この先はなにがあるの？」

相模のおかしい様子に、紫苑は更に追及する。

その時……………。

「この先は貯蔵庫があるのだ。灯馬の少年よ」

背後から低い声がして振り返ると、足音もなく歩み寄ってくるアローデイスの姿があった。

「アローデイス……さん」

「アローデイスで結構だ」

紫苑を少し突き放すようにあしらってから、相模に視線を合わせた。

「相模……………」

「……はい」

恐縮したように、相模の声が少しだけ低くなる。  
アローデイスはスツと目を細めた。

「この少年は明日から学校ではないのか？  
入学式とやらに遅れないようにする必要がある。  
……………違うか？」

「左様でございます」

相模は胸に手を当てて深く腰を折ると、紫苑の背中にそっと手を添えた。

「紫苑様、明日は早いので、今日はもうお休み下さい」

「え、でも……」

相模の態度に違和感を感じる紫苑は、提案を受け入れるのをしぶった。

しかし、アローデイスの容赦ない言葉が飛んでくる。

「いいから、休め」

「……はい……」

銀の瞳の威圧感に、紫苑は頷くしか選択肢がなかった。しびしびながらも紫苑は相模に背を押されて部屋に戻り、大人しく寝ることにしたのだった。

## 2章・偶然と必然 - 異界の扉 - ?

入学式の朝、天気は . . . . .

「いやあ、入学式日和ですね」

空は快晴。

そんな青空を仰ぎながら、相模が清々しい顔つきで微笑んだ。

「そうだね」

紫苑もリムジンの窓から空を眺めていた。

十分ほど前、馬車を門の前に移動させると言った相模を、紫苑は必死で止めた。

入学初日からあまり目立ちたくはなかったからだ。

相模は納得していないようだったが、玄関前に黒塗りのリムジンを回してきた。

走ることに十分。

国道に出ると、やはり周囲の注目を少なからず浴びてしまう。

ガラスにはプライバシーを守るための黒いシートが貼られていて、あちらから紫苑の姿が見えないことが幸いだった。

「もう少しで学校に着きますよ」

「 . . . . .うん」

声が一度喉で詰まり、こもったような声が出る。

相模がバックミラー越しに微笑みかけたのが見えた。

「紫苑様、もしかして……緊張なさってますか？」

「へっ!？」

「なさってますね」

ちょうど赤信号になった。

ハンドルから左手を離して口元に当てて笑う相模。

紫苑がムツとすると、信号が青に変わり、リムジンが緩やかに発進する。

「申し訳ございません。

ですが、大丈夫ですよ」

「……………」

「紫苑様がお通いになる学校は普通ではございませんので」

「普通じゃない?それってどういう……」

「おっと、着きましたよ」

相模の言葉に、紫苑は言いかけた質問を飲み込んで、窓の外の景色に意識を集中した。

## 2章・偶然と必然 - 異界の扉 - ?

赤煉瓦で造られた美しい校門。その先には白と赤の煉瓦がランダムに組み合わされた道がずっと続いている。

奥には校舎だろうか、校門と同じ色の赤煉瓦の建物が見える。

校門横の校名が刻まれた黒石には、金の塗料が塗られていた。

『私立海王高校<sup>カイオウ</sup>』

相模の運転するリムジンは、学校の敷地内に平然と入っていく。

紫苑は驚いて相模に尋ねる。

「相模さん、入っちゃって大丈夫なの!？」

「ええ」

相模はにこやかに答えた。

「校門から生徒用玄関までは、約一キロございますから」

「い、一キロお!?!?」

そう、忘れていた。

この私立海王高校、各界の富豪や社長の御曹司、令嬢が通う、超セレブな学校なのだ。

敷地面積は東京ドーム七個分と、学校にしては異常とも言える広さを誇っている。

学校内の施設は食堂、図書館、体育館、グラウンドなど普通の設備もあるが、馬を走らせる馬場や、各部活ごとの専用グラウンド、高級イタリアンのレストランに教会と一般の学校ではお目にかかれな

い施設も沢山あるのだ。

「はい、到着しました」

緑の木々が脇に植えられた道をしばらく走って、ようやく大きな建物が見えてきた。

ロータリーのようにカーブした道には、沢山の高級車が停まっている。

車を合計するだけで日本経済をひっくり返せるのではないかというほどの高級外車のオンパレードに、紫苑ははつきり理解した。

ここは、自分の知っている世界とは違うのだと……。

「では、私はここで」

車から降りて紫苑に鞆を手渡した相模は一礼した。

紫苑は不安げに相模を見る。

その視線に気づいたのか、相模はいつもより優しい笑顔になった。

「式が終わる頃にまたお迎えに上がりますので。

なにかありましたら、携帯の方に電話がメールをお願い致します」

「うん……」

「それでは」

再び綺麗に一礼すると、相模が乗ったリムジンは優雅にロータリーを曲がって元来た道を引き返していった。

取り残された紫苑は肩を落とす。

「とりあえず、クラス発表を見に行くか……」

校舎の左側に人が沢山集まっている箇所がある。

紫苑はそこへ向かった。

見上げるほど高い掲示板には、白い紙が貼られている。

紫苑は自分の名前を目で探した。

「一年……二組か」

全部で三クラスある内のまん中だ。

入学式の前に教室で対面があることを相模から聞いていた紫苑は、一年二組に向かった。



## 2章・偶然と必然 - 異界の扉 - ?

がやがやと騒がしい教室。

紫苑はまん中らへんの席に座り、何をすることもなく、ただ頬杖をついていた。

周囲から聞こえてくるのは、話す声、笑い声。だが、少々たちが悪い。

「玖柳院君、君と同じクラスになれて嬉しいよ！」

「宮司さん、今度私の家にいらっしやらない？」

同じクラスのクリユウイン ヨウスケ玖柳院洋介と、グンジ ミヤヒ宮司雅。

玖柳院は世界的にも有名な企業、玖柳院コンツェルン総帥の息子で、宮司は華道の宮司流の家元である。

言わばセレブ中のセレブ。

周りを取り巻いているのも、どこかの企業や有名な家の血筋の子が多いのだが、経済力のある大企業の跡取りなどは特別なのだ。

(嫌だな、こっぴついう雰囲気)

紫苑は心の中でため息をつく。

ここはもはや学校ではない。

社交界の縮図なのだ。

比較的小さな会社の子供は、同じクラスであるのをいいことに自分の会社を売り込もうとしている。

「灯馬君」

不意に背後から声をかけられて、紫苑は首だけを後ろに向けた。くるくるした茶色のくせつ毛と少したれた眠そうな目が特徴的なおっとりした少年が紫苑を見ていた。  
後ろの席の、確か佐伯侑梨だ。  
ゆっくりめの口調で佐伯はしゃべりかけてくる。

「灯馬君は、あの中に入らないの？」

佐伯は玖柳院を取り巻いている連中に視線を移しながら言った。

「別に……」

佐伯を警戒している紫苑は、言葉数少なく答えた。

素っ気なくも見えるその態度に、佐伯はにこにここと笑っていた。紫苑は不思議に思って聞いてみる。

「佐伯君は……混ざらないの？」

「僕？」

佐伯は驚いた顔をしたが、すぐに笑みが戻る。

「僕は、ああいつの苦手だから……」

申し訳なさそうに微笑む佐伯に、紫苑は少し親近感を覚えた。その時、ガラリと扉が開いた。

## 2章・偶然と必然 - 異界の扉 - ?

「はい、席に着け……」

入ってきたのは、四十代半ばくらいのがっしりした筋肉質の男だった。

おそらく担任の先生だろう。

ビシッと決めたはずのスーツがどこか外れている。

短く刈り上げた髪には白髪がちらちら混じり、見かけほど若くはないようだ。

みんなが静かに席に着くと、担任は教卓の上に手をついて教室を見回した。

「入学おめでとう。」

俺は一年二組担任の小田切だ。

一年間、仲良くやっていこう

教室内からぱらぱらと拍手が起る。

小田切は拍手が止むのを待って、再び口を開く。

「入学式までまだ時間がある。そこで、自己紹介をしようと思う。

出席番号の若い者から、名前、一言を言うように。

わかったか？ではまず、明石

明石と呼ばれた男子生徒が立ち上がる。

「アカシ コシキ明石弓彦です。」

特技は乗馬で、障害の大会で何回か優勝しています。

よろしく願います」

再びばらばらと拍手が起こる。紫苑もぼんやりと拍手した。  
続いて伊林イハヤシという女子生徒が立ち上がる。

この学校は出席番号順に席が並んでいる訳ではないので、あつちを見たりこつちを見たりと大変だ。

そして、玖柳院の番がきた。

「玖柳院洋介です。

趣味はヴァイオリンで、幼少時にウィーンに住んでいた際、オーケストラを聞きに行ったのがきっかけで始めました。

機会があれば、また皆さんにも聞いて頂きたいと思います。  
以上です」

玖柳院が締めくくると同時に、教室中がワツと沸いた。  
続いて宮司。

「宮司雅と申します。

一応、華道宮司流の家元をしております。

特技は、生け花です。

お花に興味がおありの方は、是非仲良くして下さい」

やはり教室が沸く。

その次は佐伯だ。

ゆったりとした動作で佐伯が立つ。

「ええと、佐伯侑梨です。

特技は……特に無いです。

よろしく願います」

拍手は紫苑を含めて数人ほどがちゃんとしているが、大半は気のな

い、ただ手のひらを打つだけのものだ。  
玖柳院に至っては話すら聞いていない。

これが、格差だ。

紫苑は苦々しく思いながらも、できるだけ表情に出さないよう努めた。

そして数人の自己紹介が終わり、紫苑の番がやってきた。  
紫苑は渋々立ち上がった。

## 2章・偶然と必然 - 異界の扉 - ?

「灯馬紫苑です。」

中学までは北海道に住んでました。

よろしくお願いします」

他人に誇るようなものは何も無い紫苑は、淡々と事実だけを述べて着席した。

教室内は予想通りの反応。

( いいよ、別に - - - - - )

次の人が自己紹介を始めた時に、紫苑が顔を上げると、何故か小田切と目が合った。

紫苑が動揺した瞬間、小田切の方から視線を外した。

( なんだ？ )

疑問に思った紫苑だったが、気のせいだろうと高をくくって、おどおどと自己紹介をする女子生徒に意識を集中したのだった。

「灯馬」

入学式が始まるといふ知らせが校内放送で入り、みんなが好き好きに講堂へ向かっていく時、紫苑は誰かに呼び止められた。声のした方を向くと、小田切が少し離れた所から手招きをしている。紫苑は訝しみながらも、小田切に近づいた。

「なんですか？」

紫苑が問うと、小田切は微かに声を潜めてささやくように言った。

「灯馬に頼みたいことがあってな」

「.....」

「新入生代表の挨拶をしてくれないか」

「何故僕なんですか？」

「そつだ。」

「何故紫苑なのか。」

「紫苑自身には、とんと見当がつかなかった。」

「心底不思議そうな顔をする紫苑に、小田切は衝撃的事実をささやいた。」

「こう言っちゃなんだが、お前が“あの”灯馬家だからだ。」

「封使省の大臣を代々務める家系の直系だからな」

「は？」

「封使省.....それは、日本国に存在する数々の省の中で、最

も存在意義が国民に知られていない省であろう。  
封使大臣なる者が存在するとは聞いたことはあるが、顔はおるか名前すら知らない。

ただ存在し、国民からも認識されていないような省だが、政府の中では最も重要な省であるらしい。

確か封使大臣は官房長官の次くらいに偉かった気がする。

そのお偉いさんが、僕となんの関係があるというのか。

「は？は無いだろっ。」

親御さんから聞いていないのか？」

「はあ……」

「そうか、まあ色々な事情があるからな」

小田切は自分一人で納得すると、紫苑の肩に大きな手を置いた。

「よく聞け。」

お前のお祖父さん、灯馬源一郎さんは、第四十六代・封使大臣だ」

「えっ？ええっ……！！？」

紫苑の叫び声は、人気のなくなつた廊下に虚しくこだましたのだつた。



## 2章・偶然と必然 - 異界の扉 - ?

入学式を終えて、封使館に帰ってきた紫苑はもやもやした気分一杯だった。

黒いリムジンで迎えにきたのは相模ではなく、今まで見たこともなかった男だった。

相模ならば、今日知ってしまった事実を問い詰めようと思っていたのだが、リムジンを見て最高潮に達したもやもやは、男を見て一気に冷めてしまった。

相模はまだ紫苑の前に姿を現さない。

紫苑はもやもやを抱えながら、ベッドに寝ころび天井を仰いでいる。

あの後、結局講堂で挨拶を述べさせられることになり、紫苑は緊張しながらもなんとかやり遂げた。

だが、その時にされた紹介が、いささか内容的にまずかった。

『封使大臣の孫』

そう紹介され、講堂をざわめきが雷のように走った。

挨拶を述べている間も、その後も、視線を常に感じ、息苦しかったことこの上ない。

教室に帰ると、あれほど取り巻きに囲まれていた玖柳院が、わざわざ紫苑の席に来て、友達になろうと申し出てきた。

(もちろん、適当にはぐらかしたが)

玖柳院のこの行動により、紫苑はクラス中の生徒からあれやこれやと話しかけられ、全てに曖昧な返事を返していた。

(いい気なもんだよ……)。

すぐに手のひら返すような連中、僕は好けないな)

紫苑の中で、もやもやがどんどん積もっていく。

それが小さな山となり、新たに積もるもやもやがサラサラと流れ始めた時、紫苑はベッドから跳ね起きた。

「うわぁ………！！ダメだっ！」

全ての部屋が防音構造であることを相模から聞いていた紫苑は大声で叫んでみる。

もやもやは消えそうにない。

こうなったら………と、紫苑はベッドから抜け出した。

相模を探そうと決意したのだ。

この状況をわかりやすく説明してくれるのは、きっと相模しかいないだろうと思いつき、紫苑は部屋を出たのだった。

## 2章・偶然と必然 - 異界の扉 - ?

相模を探して、紫苑はうる覚えの屋敷の中を一号館から二号館まで歩いていった。

「なんでどこにもいないんだろう?」

一応、昨日案内してもらった場所は全て見て回った。  
後、考えられるのは一カ所だけだ。

そして今、紫苑はその場所の前に立っている。

そう、そこは昨日相模に立ち入りを禁止された場所 - - - - 地下へと続く階段。

薄暗い階段の中には、暖色系の光を放つ蛍のような蛍光灯が一つ、ぼんやりと光っていた。

地下からは、ひんやりとした冷気が流れてきて、紫苑の頬を撫でる。

( - - - - - )

紫苑は階段の一段目に右足をできるだけそろりと下ろした。

ギシッ

階段は古い木でできているらしく、紫苑の重さに小さく悲鳴を漏らす。

紫苑はできるだけ足音を立てないように気をつけながら、ゆっくりと階段を下りていった。

どれだけ段を踏んだことだろうか。

長く薄暗い階段の終点が見えてきた。

先の方からぼんやりと光が差し込んできて、紫苑の足が柔らかい絨毯の感触を伝えた。

「……………」

紫苑は声が出なかった。

喉元でつかえてしまったように、あるいは声の出し方を忘れたかのように、目の前を呆然と見つめていた。

紫苑の視線の先には、見上げるほど巨大な木の扉。

だが、普通の扉ではないことははっきりとわかる。

何故なら、扉は天井にぶら下がっている古ぼけたシャンデリアの光を浴びて銀色に光る鎖で雁字搦めにされていたのだから。

紫苑は何かを引き寄せられるかのように自然と扉に近づいた。

その扉の中から、冷蔵庫を開けた時のような冷気が溢れ出してきているのがわかる。

吐く息がうっすらと白みを帯び、紫苑は身震いした。

「ハックシヨ……………ン!!」

思わずくしゃみが出た。

広いホールのような、ドームのような形状をしているせいで、それは大きく響いた。

そう、それがいけなかった。

くしゃみさえしなければ、あんな事にはならなかったかもしれなかったのに……。

## 2章・偶然と必然 - 異界の扉 - ?

「あ……」

くしゃみをした反動で、思わず扉に手をつけてしまっていたようだ。ヒヤリとした感覚に、紫苑の背筋に悪寒が走る。そして……。

「えっ？」

扉が消えていた。

先ほどまで、確かな存在感を持ってそこにあっただのに。音も振動も無く、ひとかけらの痕跡すら残さずに、きれいさっぱり失せていた。

扉が無くなったことで、冷気が紫苑の体温を更に少しずつ下げていく。

紫苑はぞくりと体の芯が凍りついていくのを感じた。

そう、それが偶然であり、同時に起こりうるべき必然であったのだ。

そして話は、最初に戻る。

## 2章・ゲームスタート？

「まずいなあ……」

紫苑は扉のあった場所を見つめながらつぶやいた。

どつという原理で扉がなくなったのかはわからないが、なくなったことは不変の事実＋

どつしたら扉が復活するのは不明

＝どつしようもない

見事な式が成立した所で、紫苑は目の前に迫っている闇の中を覗いてみようかという衝動に駆られた。

扉がはめられていた壁の横には小さなボタン。

ON、OFFと書かれていることから、おそらく扉の中の照明のスイッチだろうと推測される。

紫苑は手をボタンに伸ばしかけて、触れる直前でためらったように指を止めた。

（相模やアローデイスは僕にここを見られたくないみたいだった。もしかしたら、危険な場所かもしれない……）

真面目な男子高校生か、小心者の意見なのかはわからないが、紫苑の心の一部はそれを主張していた。

その時……。

【何をためらっているのだ？】

不意に頭の中に響いてきた声に紫苑はビクッと肩を縮めた。  
おそろおそろといった風に紫苑は声を発する。

「だ、だれ……？」

【私は名前がない。

だが、存在はある】

紫苑は警戒を解かないまま、再び話しかける。

「じゃ、じゃあ……君はどこにいるの？」

当たり前だが、辺りには誰もいない。

それに人の気配もない。

では、一体どこから話しかけてきているのか？

【私は、中にいる。

少年、お前が今立ち尽くしている部屋の中だ】

紫苑は大きく目を見開いた。

だが、いくら目を凝らしても、闇に慣れることはなかった。

【私は、ずっと一人だった。

暗い暗い闇の中で。

やっと来てくれた客人に、頼み事したい】

紫苑は声の主が哀れになった。



こんな暗い闇の中にずっと一人でいるなんて、紫苑には考えられない。

紫苑は同情からか、つい叫んでいた。

「僕にできることならなんでもするよ！」

【……………本当か？】

「うん！」

【感謝する】

端的に述べられた礼は、あっさりしたものだだったが、ほんの少しだけ、先ほどまでより温かみを含んでいた。

## 2章・ゲームスタート？

【まずは、部屋の中に入ってきてくれ】

紫苑は止まっていた指をボタンに触れさせた。

ゆっくりとボタンを押すと、急に、バンツ！！と大きな音がして部屋の中に明かりが点った。

紫苑は慎重に部屋の中へと歩みを進めた。

そこで目にした物は、紫苑の思考回路をショートさせるのには十分だった。

そこには、何本もの透明なプラスチックでできた太いパイプが大理石の白い床から伸びていた。

その数、二十八本。

一本一本がずらりと入り口に対して垂直に、二列並んでいる。

まるで、入り口からの通路を示しているかのよう。

だが、別にそのくらいではさすがに紫苑は驚かない。

紫苑の頭が上手く回らなくなったのは、もっと別の要因があったからなのだ。

パイプの中には、人がいた。

男、女、子供、大人を問わず、一つのパイプに一人、中で突っ立っ

ている。

剣を腰に差した者、杖を持つ者、難しい文字で書かれた書を持つ者中には死神の持っているような大鎌を握っている青年もいた。何本かは空な物もある。

「何、これ……」

紫苑は目の前の光景が、情報として正しく脳にインプットされなかった。

脳内のあちらこちらの回線から火花が散り、終いには大炎上しそう

【我々は閉じ込められているのだ。

永久の昔から、ずっと……。我々を助けてくれるか？】

「もちろん！

こんなのひどすぎるよ」

【では、その方法を教えよう】

声の主は、低い声で紫苑にある言葉を告げた。

紫苑はコクンと頷いて、復唱しようとする。

ちよつどその時だった。

「紫苑様……」

紫苑が入り口を振り向くと、肩で息をしている相模が立っていた。焦ったように紫苑に向かって叫ぶ。

「なりません!!」

今すぐここから出るのです!」

『声』が囁くように言う。

【惑わされるな。

彼等是我々を閉じ込めていたのだ。

しかもそれをお前に知らせなかった。

それもそうだ、彼等はなんの理由もなく我々を監禁しているのだからな】

紫苑は相模を睨んだ。

許せなかった。

優しい顔をして紫苑に接していたくせに、地下では人を監禁していた。

相模は紫苑を不安げに見る。

「紫苑様「僕は.....」」

相模の言葉を遮るように言葉を発した。

「騙されないぞ」

## 2章・ゲームスタート？

紫苑の言葉に、相模は一瞬怯えたように肩をすくめたが、すぐさま  
つすぐ紫苑を見つめる。

そして紫苑の考えている事がわかったのか、小刻みに首を横に振っ  
た。

「……………いけません。

その言葉だけは……………」

【さあ……………言うのだ。

我等を、救ってくれ】

『声』が引き金となった。

紫苑は高らかに詠唱する。

『我、灯馬の血を引く者なり。大地の風、空の海よ、我が血に従え。  
封じられし使徒を解き放たん。  
我が言葉よ、真となれ！』

紫苑の体から、青白い閃光がほとばしった。

その閃光は雷のように部屋を駆け抜け、蜘蛛の巣状に拡散した。

その内の何本かが、天井に達し、白熱灯を割った。

明かりが半減し、部屋は薄暗くなる。

流れる閃光と降り注ぐ白熱灯の破片の中、紫苑は二十八本のパイプが次々と光り、一斉に消えたかと思えば、中にいたはずの人々の姿もなくなっていた。

「き、えた……………」

その刹那、パイプがガラガラと倒れてきた。

紫苑に向かって……………。

「えっ？」

「紫苑様……………っ!!」

相模が走ってきて、紫苑を抱きすくめるように庇った。

ガッ!!と鈍い音がした。

「相模さん……………？」

フツと紫苑の体に回されていた相模の腕が離れた。

長身の細い体が倒れていくのを紫苑はただ眺めることしかできなかった。

相模が床に倒れ込んだ瞬間、紫苑はハッと我にかえった。

相模の側にしゃがみ込む。

「……………相模さん!相模さん!」

肩を掴んで揺さぶるが、反応はない。

見るとこめかみの辺りから、頬にかけて紅く艶やかな一筋の線が見え、美しい顎のラインに沿うように流れていった。

その紅いものが相模の頭部から流れ出している血だということに気づいた紫苑は、ハツと息を飲んだ。

更に激しく肩を揺さぶる。

「相模さんっ！！」

「そんなに揺さぶらない方がいいよ」

突然背後から聞こえた声に、紫苑は勢いよく振り返る。

そこにいたのは、予想外の人物だった。



## 2章・ゲームスタート？

聞き覚えのある、おっとりとした声。

少し眠たげな、犬のような目。

その顔に、紫苑は固まる。

「佐伯……君？」

そう、そこに立っていたのは、間違いない佐伯侑梨本人だったのだ。侑梨はまるやかな笑顔を紫苑に向けた。

その顔はつい今さっき教室で見た顔そのままだった。

「やあ、紫苑君。

こんにちは」

笑顔のまま侑梨は軽く右手を目の高さまで持ち上げた。

「な、なんで、なんで……」

壊れかけたCDプレイヤーのように同じ言葉を繰り返しつつぶやく紫苑の瞳には、不安と焦り。

侑梨はそれを見て、にやにや微笑んでいる。

「びっくりした？」

僕がここにいて」

紫苑はガクガクと頷く。

「ありがとうね、『使徒』を解放してくれて。

紫苑君のおかげで……」

侑梨はわざと間を開けたかのように見えた。

そして一層深い笑みを見せる。

その笑みは優しいのだが、紫苑の背中をぞくりとさせるような妖艶さを纏っていた。

「この世界が止まった」よ

世界が、止まった………？

意味のわからない紫苑に、侑梨は口元に手を当て、クスクスと笑った。

そして小馬鹿にしたように少し上目遣いで紫苑を見る。

「あれ？

もしかして、何も知らないの？

灯馬の血を引いているくせに？

本当に直系？」

「何も………ってなんだよ」

紫苑はギツと侑梨を睨みつける。

その紫苑の瞳に侑梨は目を輝かせた。

「いいね、その目。

不信任感、焦り、不安、葛藤。

負の感情が渦巻いてるよ」

「答えるよ。

なんだ、世界が止まったって」

「………いいよ」

侑梨は口角をキュツと吊り上げて、紫苑の左腕を指差した。  
紫苑の視線も自分の腕に移る。

「時計、見てみなよ」

紫苑は少し訝しみながら、左腕につけた腕時計の文字盤を見て目を見張った。

文字盤には長針と短針、秒針。

いつもならば正確に時を刻み続けているそれらは、停止していた。ちょうど五時二十九分十二秒で動きを止めていたのだ。

「何、故障？」

「残念ながら違うね」

侑梨はクシッと微笑んだ。

「さっきも言っただろ？」

世界が止まったって。

時計が動くのをやめたんじゃない。

世界の停止によって動きを止めさせられたんだ」

「そんな……」。

そんなSFみたいな話、信じられ訳ない」

## 2章・ゲームスタート？

そう言うってはいるものの、紫苑の額には焦りから、汗が一筋伝った。

「……………」

侑梨は何も言わない。

ただ黙って紫苑は繰り返すのを聞いている。

紫苑は侑梨の目を見据えた。

「君は、誰？」

侑梨の目が怪しく光った。

「僕は、佐伯侑梨。

君の力を試してみたんだ」

「あの『声』は君か？」

「そつだよ。

まんまと君が騙されてくれたおかげだ。

礼を言っよ」

紫苑は罪悪感から一瞬動揺したが、すぐに唇を開く。

「何が目的だ」

「……………」

再び侑梨は黙る。  
まるで品定めをするように紫苑を頭の先からつま先までじっくり眺めてから、話し始めた。

「僕とゲームをしよう。  
この世界をかけたゲームを」

「ゲーム……？」

「君は『使徒』を解放した。  
僕がその使徒をどこかに隠す。君が全員捕まえられたら君の勝ち。  
世界は再び動き始める」

「もし、負けたら……？」

侑梨の顔が一層意地悪いものになる。

「僕の勝ち。」

世界は永久に停止する」

言い終わると、侑梨はくるりと紫苑に背を向けて、部屋の壁に手をついた。

紅い刻印のようなものが、壁の一部に現れた。

白い壁を切り取るかのように、ちょうど扉くらいの大きさの真っ赤な刻印が壁に刻まれる。

侑梨はニコツと無邪気な笑みを浮かべる。

「ここがスタートだよ。」

さあ……よい、どん！」

そう言うと、侑梨は刻印に向かって近づき、スイツと飲み込まれた。

紫苑は唇を噛む。

その時。

「紫苑……………っ!!」

入り口から声が出て、見るとザックが叫びながら走ってくる所だった。

「何が起こった？」

倒れている相模を見て、ザックは紫苑に問う。

紫苑はザックを見て、ほとんど泣きそうな顔で言った。

「相模さんを……治療して。  
そしたら全部話すよ」

ザックは何か言いたげな様子だったが、頷いた。

「わかった」

相模を軽々と肩に担ぐと、二人は部屋から立ち去ったのだった。



## 2章・旅立ちの決意？

二号館の三階、医務室。

学校の保健室をイメージしてもらつとぴつたりだろう。

薬品の匂いがツンと鼻をつき、茶色いサッシがはめ込まれた窓の外から差し込んでくる夕日が、紫苑の横顔を煌々と照らしていた。

小さなパイプ椅子に腰掛けた紫苑は、目の前の清潔そうなベッドで眠っている相模の顔を見つめている。

紫苑を庇った時の相模の頭部の傷を治療していたアローデイスは、ピンセットにつまんだ脱脂綿をゴミ箱に捨てると紫苑に向き合った。

「何があつたんだ？」

部屋の中には、窓辺にもたれるザック、扉の近くにしゃがんでいるルナセル、そしてアローデイス。

灯馬家の三人の居候達がこの部屋に集結している。

紫苑は暗い目でアローデイスを見つめ返す。

「実は……」

「ふむ、そのようなことがあったのか……」

三人は紫苑の話を途中で遮ることなく聞いてくれてから、ザックが頷きながら相槌を打った。

紫苑は目の前で厳しい目をしているアローデイスに心の底から聞いた。

「教えて下さい。」

何が、起こったんですか？」

「……………」

アローデイスはむっつりして、紫苑を睨むように見つめたまま口を開こうとはしない。

ザックがアローデイスに言う。

「アローデイス、起こったことだ。」

今更どうすることもできない。紫苑にも知る権利はある」

「そつだよ、教えなかった僕等も悪いんだしさ」

ルナセルも口を尖らせて言うと、アローデイスはハアッと大きく息を吐き出す。

イライラしている感情を全て胸の中から排出しているかのように見えた。

「今回の件を説明するには、まずは我々のことを説明する必要があるだろう」

アローデイスは眉間にシワをギュッと寄せたまま、そんなに思い詰めたような表情をしていたら、眉間からシワがとれなくなるのではないかと紫苑は少し懸念した。

アローデイスはボソボソと話し始めた。

## 2章・旅立ちの決意？

「私達は人間ではない。

天上におわします神に創造され、遣わされた『使徒』だ」

「『使徒』？」

「『使徒』は、神に造られた、この世界にある二十八の様々な存在の象徴で、それらは二つの種類に分かれている」

アローデイスは人差し指を立てる。

「一つ目は、“自然”（ネイチャー）だ。

例えば風、大地、空というような存在」

そして中指。

「もう一つは、“職業”（ジョブ）。

代表的な『使徒』は、執行人、錬金術師、学者などだ」

「あの、ネイチャーはわかるけど、ジョブって神様が作り出したものじゃなくて人間が作ったんじゃないの？」

紫苑は感じた疑問を素直に述べてみる。

「最初、神がお造りになったのはネイチャーだけだった。

だが、この世界は実質人間が支配するようになってしまい、ネイチャー達はその力を更に強くし、世界は一時期文明を自然が飲み込んでしまった。

世界の均衡を崩さぬために、神は人類の作り出したものであるジヨブの『使徒』を生み出したのだわかったか？」

紫苑はコクンと頷いた。

アローデイスは先を続ける。

「そして『使徒』は存在そのものを司っている。だから世界は『使徒』を失うと、活動を停止してしまうのだ。今回の場合、そのために世界は止まった」

「あのさ、『使徒』を解放してしまった時に唱えた呪文に灯馬の名前が入っていたんだけど、それってなんで？」

「灯馬の一族は、代々、それこそ神がジヨブを作り出してからずっと、『使徒』の力が暴走しないように見守ることを神によって義務づけられてきたのだ。それ故に現在の当主である源一郎は封使大臣をしている」

紫苑は三人をぐるりと見回す。ルナセルが小首を傾げたのが見えた。

「君達三人は、なんでパイプの中に入っていないの？」

「それはね……っ！」

ルナセルが子供らしい無邪気な笑顔を浮かべて紫苑の問いに答える。

「僕等は、『三大使徒』っていつて、他の『使徒』とは違う存在なんだ！

例えば……」

ルナセルの短く細い指がザックを指した。  
指されたザックは少し驚いたような表情をして、胸の前で腕を組んだ。

「ザックは、『太陽』……………。まあ僕等は【ザ・サン】って呼んでるんだけど。

太陽を司る『使徒』で……………」

続いてルナセルの指がアローデイスを指す。

「アローデイスは、『ザ・ムーン』。  
月を司る『使徒』」

そしてルナセルは自分を指す。

## 2章・旅立ちの決意？

「僕は【ザ・スター】。

お星さまを司る『使徒』なんだよ」

「俺達三人は、何故か神から強大な力を与えられた。  
だからあんなパイプじゃ、封じることなんてできないんだ」

ザックが言うと、アローデイスは冷ややかな口調で紫苑に問うた。

「さて……どうする？」

「……何が？」

紫苑は突然の問いかけに首を傾げた。

「『使徒』を集めに行くのか、否か」

「行きます」

紫苑は即答する。

自分が勝手な行動をしたせいで、世界が止まってしまった。

ならば自分の力で元に戻すのが道理というものだ。

紫苑のまっすぐな目をアローデイスは逸らさない。

しばらく二人は黙ったまま互いを見て、静かに呼吸した。

ふいにアローデイスがフツと目を逸らした。

「……いいだろう。」

我々も共に行こう。

お前一人では失敗するのがオチだからな」

アローデイスが冷たく言うと、ルナセルがケタケタ笑った。

「またまたあ、紫苑兄ちゃんのことか心配なくせに。」

アローデイスはもうちよつと素直になつた方がいいよ」

「……余計なお世話だ」

ぷいと横を向いてしまったアローデイスを見て、紫苑は思わず笑い声を漏らした。

「ありがとう。」

アローデイス、ルナセル、ザック」

小さな声でつぶやいて、まだ目を覚まさない相模を見る。

「ごめんね、ありがとう。  
行ってきました」

随分と長い間話していたにも関わらず、窓から差し込む夕日は全く変わりなく、風も吹かないし、雲も動かない。

「そうと決まれば、早い方がいい。  
今から行くぞ」

ザックの声にせかされて医務室に相模を残した紫苑達は、『使徒の部屋』と呼ばれているらしい地下に向かい、侑梨がやってみせたように刻印をくぐつたのだった。



### 3章・【ザ・リーフ】？

吹きつける乾いた風。

微かに香る草木の匂い。

足元でさわさわと揺れる背丈の低い草。

紫苑は目の前に広がる光景に、目を奪われた。

「ここは……」

広がるのは青々とした草原。

周囲にはうっそうと森。

森が開け、綺麗な円形に草原がある。

その中央に、紫苑、ザック、アローデイス、ルナセルが立っていた。

ザックが周りを見回しながら、顎をさすった。

「ん……、おそらく俺達がいた世界とは別の世界だろう」

「異世界、ってこと？」

ルナセルの言葉にアローデイスが頷く。

紫苑は眉間にシワを寄せた。

「異世界転生……」

有り得ないよ」

アローデイスがため息をついて、まるで幼稚園児に話しかけるように言う。

「いいか、根拠は二つ」

アローデイスは二本指を立てた。

「あの刻印は輪廻を示す文字列でつづられていた」

ザックとルナセルもうんうんと頷く。

どうやら三人には刻印の意味がわかっていたらしい。

「そして、ここは時が動いている。

我々の世界は全機能を停止しているのだ。

以上のことからここは異世界だとわかる」

紫苑は納得せざるをえない状況になる。

現に、頬を撫でる風。

この場所は生きている。

やっぱり異世界だというのは疑いのない事実なのだろうか。

「なんかさあ……」

ルナセルは顔をしかめて口を開く。

「変な感じ。

さつきから気持ち悪い」

普段も色白なルナセルの顔は、更に青白くなっていた。

小さな体からふらりと力が抜けて倒れそうになるのを、ザックが慌てて支えた。

「ルナセル!？」

ザックの腕の中でルナセルはぐったりと荒い息をしていた。額には大粒の脂汗がにじみ、その内の一つが頬に伝う。

ザックは動揺して、後ろに立っているはずのアローデイスを振り返りながら叫んだ。

「アローデイス！  
ルナセル……が……」

ザックの言葉の最後が、どんどん小さくなって消えていった。ルナセルの蒼白な顔を見ていた紫苑は、アローデイスを見て、叫び声を上げた。

「アローデイスッ!!?」

### 3章・【ザ・リーフ】？

アローデイスは地面に片膝を着き、今にも崩れ落ちそうに息を吐いていた。

紫苑はアローデイスに駆け寄った。

ルナセルと同じく、アローデイスの顔も血の気が失せて、雪のように真っ白になっていた。

「アローデイス……」

紫苑がつぶやくと、アローデイスは辛そうに顔を上げて、首を横に振った。

色素の抜けた白い唇が、微かに震えながら言葉を絞り出す。

「心配ない……」。

だが、気をつける……」。

何かが……近づいてくるぞ」

紫苑とザックはお互いに顔を見合わせた。

ザックはルナセルの耳元で囁く。

「ルナセル……、【カード】になれるか？」

-----【カード】。

新しい単語に紫苑は戸惑うが、ルナセルはザックの問いかけに顔を歪めて小さく頷いた。

途端にルナセルの体が、ぼんやりと黄緑色の光で覆われた。

光はソフトボールくらいの大きさまで縮むと、ポワンとはじけて消えた。

「何をしたの？」

紫苑が聞くと、ザックは手のひらに乗っていた一枚のカードを紫苑に向けた。

紫苑がカードを受け取ってみると、そこには占いに使うタロットのような図が描かれていた。星を腕の中に抱いた、小さな少年の姿、それはまさしくルナセルだった。

「……………ルナセル？」

「ああ」

ザックは頷いた。

「俺達『使徒』は【カード】になることができる。

【カード】の方が、体力を使わないんだ」

そう言ってザックはアローデイスに話しかける。

「アローデイス、お前も【カード】になっとけ」

「しかし……………」

【カード】になるのを渋るアローデイスに、ザックは明るい笑顔を向けた。

小麦色の肌に、白い歯がまぶしい。

「心配するなよ。

何が来ようが大丈夫だ。

俺だって三代使徒の一人だ」

「ふふ、三代使徒……。  
君達が……ね」

遠くから幼さを含んだ声が聞こえてきた。  
紫苑もザックも辺りを見回す。すると、森の中で一際高い木をザックが指差した。

「あいつだ」

ザックの指差した方向を紫苑も目で追った。  
木の先端部分の枝に、腰かけている人物を視認して、紫苑は自分の目を疑った。

「子供じゃないか」

### 3章・【ザ・リーフ】？

芽吹いたばかりの若葉を思わせる黄緑色の髪はふわふわとカールしていて、英国の少年のような雰囲気をかもし出している。色の白い顔に、トパーズのような金色の瞳がキラキラと輝いていた。

茶色いローブに似たダボダボの服を纏った人物は、明らかに幼かった。

年齢は大体ルナセルと同じくらいだと思われる。

「【ザ・リーフ】か……」

ザックがつぶやいた言葉を、紫苑は聞き直す。

「【ザ・リーフ】？」

「『使徒』の一人だ。」

【葉】を司るから【ザ・リーフ】と呼ばれている」

ザックは木の枝からひらりと飛び降りる少年から目を離さないまま、説明した。

少年はゆっくりと紫苑達の方へ歩み寄ってきながら、優しい笑顔を向ける。

「【ザ・リーフ】は『使徒』としての名前。」

僕はリスラスだよ」

リスラスの髪を、そよいだ風が揺らしていく。

その様子は、まさしく木に茂る葉っぱのようだった。

リスラスは紫苑達の数十メートル前で足を止めると、紫苑を見て、

にっこり微笑んだ。

「やあ、はじめまして。  
灯馬家の直系さん」

リスラスに何か言おうとした紫苑を庇うようにザックは紫苑の前に  
進み出た。

紫苑はザックの横に首を突き出して様子をつかがおうとする。

「久しぶりです、ザックさん。前にお会いしたのは確か……  
五百年前、でしたっけ？」

「リスラス、お前は敵か？  
それとも味方か？」

友好的に話しかけてくるリスラスを少し突き放すようにザックは冷  
たい口調で返した。

リスラスは肩をすくめると、小さくフウと息を吐いた。

「せっかく会えたんですから、もう少し話がしたいと思っただん  
ですけど、どうやら気づいてしまっているようですね」

「……………」

ザックは無言だったが、紫苑にはそれがザックの肯定の返事  
のよう  
に思えた。

ザックがリスラスを睨んだまま、ゆっくりと唇を動かす。

「アローデイスとルナセルに何をした？」



紫苑の肩がビクンと跳ねる。

背後にいるアローデイスを振り返ると、先ほどまでより呼吸が荒いものに変わっていた。

リスラスはザックの厳しい口調にも、相変わらず笑顔のままだった。

「何って……もちろん僕の能力の一つですよ」

### 3章・【ザ・リーフ】？

「能力？」

紫苑が不思議そうにつぶやくのと同時に、ザックは眉間にシワを寄せた。

リスラスは口の端に微笑を浮かべながら、自慢話でもするかのような得意げな口調で話す。

「僕のグランドアビリティ……いわゆる【付与能力】は、衛星に影響を与える、【サテライト・ゾーン】」

【サテライト・ゾーン】  
直訳すると、衛星の領域。

一体どういうアビリティなのか、紫苑が首をひねっていると、ザックがコソツと教えてくれる。

「【サテライト・ゾーン】は、リスラスのグランドアビリティで衛星に身体的なダメージを与えるものだ。

アローデイスは月、地球の衛星だが、ルナセルは星という総称だ。

世界に存在する全ての星を司っている故に、それこそ抱える衛星の数は計り知れない。

だから、意識を混濁するほどの影響を与えられたのだ」

「でもそれってリスラスの司っている【葉】とは関係ないアビリティなんじゃない？」

「グランドアビリティは、司る物に関わらず『使徒』それぞれに与えられた能力のこと。」

だから司る対象には関係ないんです」

その疑問には、リスラスが答えた。

紫苑が納得して頷くと、ザックはその耳に囁いた。

「アローデイスのことを頼んでいいか？

強情な奴だが、できることなら【カード】に戻るように説得してやつてくれ」

「……………わかった」

紫苑はザックの後ろから出て、過呼吸のように小刻みに息をしているアローデイスに近づく。アローデイスはそばに寄ってきた紫苑にチラリと一瞥をくれると今にも消え入りそうな声で言った。

「……………なんだ…。」

私、なら心配は無用だぞ。

ゴホッ、ゴホゴホッ！！」

アローデイスは急に咳き込みだした。

咳の合間に苦しそうな呼吸が続き、紫苑はアローデイスの背中をそつとさする。

ザックは、リスラスを睨みつけた。

「早くアビリティを解除しろ！

さもないと本気で仕留めるぞ」

ザックの体から、真っ赤に燃え上がる炎のようなオーラが具現化して立ち上るのが見えた。

紫苑はその威圧感に思わず一歩後ずさった。

しかしリストラは臆することなく、黒い笑みを浮かべたまま、ザツクに言い放つ。

「久しぶりです、この感覚。では始めましょうか。」

「世界をかけたゲームを」

### 3章・【ザ・リーフ】？

リスラスが言い終わるか終わらないかの間に、ザックは地面を強く蹴り、矢のようにリスラスに向かっていく。

固めたザックの右拳が、リスラスの顔面を強襲した。

それをリスラスは体を後ろにそらせて、鼻先でかわす。

そして殴りかかって体勢を崩したザックの体を、自分がバク宙をするのに合わせて回転しながら思いきり蹴り上げた。

「グッ!!」

短いうめき声を漏らして、大きなザックの体は宙を舞い、リスラスの背後の森に突っ込んだ。バキバキと木が折れる音がして、驚いた鳥が何羽も慌てて飛び去っていく。

アローデイスは荒い呼吸の間に言葉を挟む。

「……………リスラスめ……………」

以前より、力が増しているのか……………」

リスラスは驚いた顔をして自分の両手を握ったり開いたりしている。そして幼い子供が楽しい遊びを見つけた時のように無邪気に笑った。

「なんだろう……………？」

力が湧いてくる」

そうつぶやいて、リスラスは紫苑達に向き合った。

金の瞳が妖しい光を帯びていて、紫苑の背筋は凍りついた。

リスラスは紫苑の感じている恐怖をじつくりと味わうかのようになり、少しずつ二人との距離を縮めてくる。

「アローデイス。」

早く【カード】に戻って」

紫苑はザツクに言われたことを何故か思い出していた。

何気ない言葉だったが、それが自分にとって最も重要なことだと感じたからだ。

アローデイスは首を横に振る。そして、膝に手を置いて静かに立ち上がった。

「あれ？」

リスラスはアローデイスを見て不思議そうに足を止めた。

アローデイスは、立っているのがやっとのようで、肩で荒く息をして額には大粒の汗がにじんでいる。

だがその瞳は、依然として強い銀の光を放っていた。

「アローデイス……？」

紫苑が名を呼ぶと、アローデイスは少し紫苑をうかがうように視線を下げて軽く頷いた。

リスラスがうふふつとかわいらしさのある声で笑う。

「アローデイスさん。」

無理はなさらないで下さい。

いくら三代使徒の一人でも、その状態じゃ僕には勝てません」

「ククッ」

すぐそばから笑う声がして、紫苑は声のした方を見た。

そこには、アローデイスの顔。口元は笑っているが、眉だけは辛そうに寄っている。

リスラスから初めて笑みが消えた。

「何がおかしいんですか」

リスラスの問いに、アローデイスはまっすぐにリスラスを見つめた。その眼光は力強く、リスラスはブルツと身を震わせた。

### 3章・【ザ・リーフ】？

「いや、すまない。」

お前がなんとも見当違いの事を言うのでつい、な」

「見当違い……………」

リスラスの表情が曇る。

アローデイスは射抜くようにリスラスの目を見つめた。

「私はこの自分の状態で、お前に勝てるなどとは全く思っていない」

リスラスはムツとして叫んだ。

「じゃあ、僕は見当違いじゃないじゃないですか。」

見当違いはあなたの方だ」

再びアローデイスは、リスラスを馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

「そう急くな。」

“急いては事を仕損じる”という諺を知っているか？

急いで得な事など、この世には数えるほどしかない」

「ツ……………」

リスラスはアローデイスの言葉に悔しそうな表情を浮かべ、何か言い返そうと口を開きかけたが、苦々しげに口を閉じた。

アローデイスは満足そうに頷いた。



「それでよい、年長者の言うことは素直に聞くのが一番だ」

「早く僕を見当違いと言う理由を聞かせて下さい」

リスラスはイライラしているようだ。

無意識なのか、足が小刻みに動いている。

その時、アローデイスが激しく咳き込んだ。

「うつ……………ゴホツゴホツ!!」

「アローデイス!?!」

紫苑は慌ててアローデイスの背中をさする。

しばらくして、咳が収まってきたアローデイスは、自分の背中に当たられている紫苑の手を、優しく掴んで外した。

「無理はしない方がいいのではないですか」

「お前のせいだろう」

涼しい顔のリスラスに、アローデイスは嫌みのように言う。

リスラスは返事をしない。

無言で自分が見当違いと言われた理由を催促しているようだ。

「結論から教えてやろう。

私自身は、お前に勝てるなどとは全く思っていない。

私“自身”はな……………」

“自身”の部分を強調して言うアローデイスに、リスラスは首を傾げる。

「一体、どういう……！」

リスラスは怒鳴りかけて、ハッと目を見開いた。その瞳には、戸惑いと焦りがたたえられている。

「こういうことだ……！」

アローデイスがニヤリと笑ったのを紫苑は見た。ゆっくりと静かにアローデイスの唇が動く。

### 3章・【ザ・リーフ】？

「【ナイトフェル】（夜の帳）」

アローデイスの言葉が旋律のように空に響いた。

すると、たちまち太陽は沈み、辺りは月と星に照らされた夜になった。

さつきまでとは違う、湿気を含んだ柔らかい風が三人を包み込む。

その風の匂いも、夜露に濡れた植物達の発する、夜にしか嗅ぐことのできないものだった。

リスラスはアローデイスをキッと睨みつける。

「アローデイスさん、一体何をしたんですか？」

「見てわからないのか？」

私のアビリティで、昼を夜に変えたただけだ」

リスラスはブンブンと頭を横に振る。

「違う!!」

僕が聞いているのはそんな事じゃない!

何故夜に変える必要があったのかという事です!」

アローデイスは冷たく言い放つ。

「そんな事くらい、自分で考える。

まあ、どうしてもと言うなら、教えてやらんこともない」

アローデイスの言葉に、リスラスは唇を噛む。

何が起こるかわからないという恐怖と、プライドが激しく対立しているのだということがうかがえる。

しばらくして、リスラスは悔しそうに言葉を発した。

「教えて……下さい」

俯きながら消えそうな声でつぶやくリスラスは少し可哀想に見えた。アローデイスは満足げに頷く。

「いいだろう」

そして穏やかな声で話し始めた。

「まず第一に、日光を奪うことが目的だ。

お前は【フォトシンセサイズ】（光合成）というアビリティを持っていて、体力を癒やす効果があるからな。それを封じるためだ」

そこまで言うと、アローデイスはリスラスの背後の何かを見てフツと笑った。

「これ以上は、言わずともわかるだろう」

「……………?」

不思議そうに首を傾げるリスラスの背後から、低く、静かな怒りを含んだ声が響いてきた。

「こつこついう意味だ……」

リスラスの反応は素早かった。声が聞こえた刹那、体を翻し、攻撃に対応できる体勢を取ったが、声の主の方が早かった。

「グウツッ!」

うめき声と共に、リスラスの体が宙を飛んだ。

そして、紫苑の背後の木立に突っ込む。

アローデイスは再び地面に崩れ落ちる。

暗くてよくわからないが、大柄な人影が二人の前に立ちふさがる。それは、カーキ色の服のあちこちに葉っぱをつけたザックだった。ザックは二人の様子を目の端でうかがう。

「無事か!？」

「それはこつちのセリフだよ」

紫苑はホツとして言い返す。

### 3章・【ザ・リーフ】？

「このとおり、大丈夫だ！」

ザックはニヤリと笑って、グツと力こぶを作ってみせる。

丸太のような太くたくましい腕が更に盛り上がる。

そしてうずくまるアローデイスを見て、微笑んだ。

「ありがとうな

もう大丈夫だ、【カード】に戻ってくれ」

アローデイスは苦しそうに顔を上げて苦笑いする。

「薄情な奴だ」

そう言うと、アローデイスの体を黄緑色の光が包み、ルナセルと同じ、長方形のカードに変わった。

地面に落ちたそれを、紫苑は拾い上げる。

三日月の弧の部分に腰かけ、分厚い本を読む長髪の男。

カードに描かれた姿は、まさにアローデイスそのものだった。紫苑はザックの背中を見上げる。

「アローデイスは、ザックに何をしたの？」

「また後で教えてやるよ」

ザックの目は、木立の中からヨロヨロと立ち上がるリスラスを見据えていた。

リスラスの口の端からは、唇が切れたのか紅の血が一筋、顎に伝っている。

リスラスは唾液に混じった血を吐き出しながら、憎々しげにザックを見た。

「何故だ………?」

僕の攻撃は急所に当たったはずだ。

内臓が潰れてもおかしくないのに……。

なんで、なんで………」

今にも泣き出しそうなリスラスに、ザックはなだめるような穏やかな声で話しかける。

「アローデイスのアビリティ、【ナイトフェル】がもたらしたのは、夜。」

夜は太陽の輝きを強くする。

そう、ちょうど闇の中の光が、まばゆく輝くようにな」

リスラスは、ハア、ハアと肩で息をして、近くの太い木に寄りかかった。

「そんなの………、知らなかったよ。

勉強不足、か………な………」

リスラスの体から力が抜け、細い体はずりりと木に背中を預けて、座り込むように意識を失った。

ザックは、大きく息を吐く。

「終わった………な」

紫苑はへなへたと地面に座り込んだ。

安心したのか、体の力が抜けてしまったようだ。

ザックは父親のような温かい笑みを浮かべて、紫苑の腕を掴むと優しく立たせた。

「ありがとう」

紫苑がお礼を言うと、紫苑はやんわりと首を横に振った。

そして、紫苑が持っているアローデイスのカードを見ながら言った。

「俺は何もしてないぞ。

アローデイスの知識と機知に救われた。

礼を言うならあいつにだ」

それはそうと……と、ザックはリスラスを見た。

リスラスは眠っているようだ。すうすうと小さな寝息をたてている。



### 3章・【ザ・リーフ】？

「あいつを、始末しないとな」

そう言つてリスラスに近寄ろうとするザツクの服を、紫苑は思わず掴んでいた。

「ん、なんだ？」

怪訝そうな顔をしてザツクは紫苑を振り返る。

紫苑は服を握る手の力を更に込めた。

「始末するつて……殺すつてこと？」

紫苑の手は震えていた。

襲ってきたリスラスに応戦するのは仕方ないと思う。

だが、だからといって殺すのは間違っている。

……というか、紫苑は目の前で人が死ぬかもしれないということが怖かったのだ。

そんな紫苑の心境を察したのか、ザツクは紫苑の手に自分の手を重ねた。

「殺しはしない、大丈夫だ」

大きくて、力強くて、何より温かい手。

それは太陽の『使徒』なのだから温かいのは当たり前なのだろうが、じんわりと伝わってくる温もりは、明らかに人間のものだった。

ザツクの言葉に安心して、紫苑は服から手を離す。

元あるべき位置に戻ろうとする紫苑の腕をザツクは掴んだ。

「紫苑も一緒に来い。  
きつと、お前の力が必要だ」

強く引つ張られて、紫苑は抗う術もなく、リスラスの方へと半ば強制的に連れていかれる。

リスラスは、微かな寝息をたて、先ほどまでの険しい顔とは打って変わって、年相応の柔らかな顔つきに戻っていた。

「紫苑、ルナセルの【カード】を持っているな？」

ザックはそのそばにしゃがみ込むと、紫苑に問う。

紫苑はカードをしまった制服のズボンのポケットからアローデイスのカードとルナセルのカードの二枚を出した。

そして、アローデイスのカードだけをポケットにしまい直すと、ルナセルのカードをザックに差し出した。

「持つてるよ」

「よし」

ザックは紫苑からカードを受け取ると、絵の描かれた方を表に向けて、語りかけた。

「ルナセル、起きろ」

すると、その声に呼応するようにチカチカとカードが光った。だが、その光はすぐに消え、また普通のカードに戻ってしまった。ザックが苦々しげに言う。

「あいつめ、二度寝しやがった……」

【カード】状態の『使徒』が二度寝などをするのか……。

紫苑は想像して、クスクスと笑ってしまふ。

ザックは何度も声をかけていたが、面倒くさくなったのか、不意にカードをペシリと叩いた。

『痛ったあ！』

カードから声が聞こえてくる。それはルナセルの声に間違いなかった。

### 3章・【ザ・リーフ】？

『痛いよお、ザックう………』

甘えた声を出すルナセルに、ザックはフンと鼻を鳴らした。

「なあに可愛い子ぶってんだ。いいから早く実体化しろ、さもないと………」

ザックは言いながら親指と中指で輪っかを作る。デコピンの時のそれだ。

ルナセルのカードの輝きが一層せわしなくなる。

『うあっ！』

ちよっと待ってよお！

戻る、戻るからあー！』

半べそのルナセルが黄緑色の光に包まれて、元のルナセルの姿に戻った。

ルナセルは少しむくれてザックを見る。

柔らかそうな頬がぷくつと膨らんだ。

「ザックはいちいち荒いんだよお………」

「なんか言っただか？」

ルナセルはムスツとしながらも首を横に振る。

「で、何するの？」

紫苑がザックに尋ねると、ザックはルナセルと紫苑を交互に見て答える。

「これはアローデイスの憶測だが、リスラスは何者かに操られている可能性が高い」

「それは僕も思ったなあ」

ルナセルが渋い顔で頷いた。

「だってリスラスはこんな事する子じゃなかったもん」

「ああ」

ザックもそれに同意した。

そして話を本筋に戻す。

「ルナセル、お前【ヒーリング・スター】は使えるな？」

「使えるよ」

また、効果のわからないアビリティの名前が出て、少し話から浮きかけていた紫苑に、ザックは話を振る。

「紫苑、アローデイスの【カード】を出せ」

「えっ？……ああ、うん」

紫苑は言われるまま、アローデイスのカードをポケットから取り出

した。

そのカードは、先ほどまでと違い、淡くぼんやりと光を出している。

「ルナセルの【ヒーリング・スター】に、合わせてお前はアローデイスが教える言葉を復唱しろ」

紫苑はアローデイスのカードを見下ろす。

さっきまでのアローデイスの状態を思い出して不安になったからだ。それに気づいたのか、アローデイスはチカチカと光を放つ。

『なんだ、そんな物憂げな顔で見つめおって……』

「だって、大丈夫なの？」

『お前に心配されるほど、弱ってはいない』

今までと変わらない冷たい口調に、紫苑はホツとした。

「わかった」

笑顔で頷く紫苑に、アローデイスのカードは一瞬息を飲むように光が揺らぎ、再び瞬きだした。

「で、アローデイス。

やる事はわかったが、できたらそれによってリラスの操り人形状態が解かれる理由を知りたいんだが？」

みんなが感じていたであろう疑問を、ザックが代表して問う。

### 3章・【ザ・リーフ】？

『簡単な事だ』

アローデイスは淡々と理論を並べていく。そのたびに、カードは一際まぶしく光る。

『紫苑がリスラスを正気に戻す呪文を詠唱する。

これは我々では不可能だ。

代々『使徒』を司ってきたのは灯馬の者だ。

故に灯馬の直系である紫苑がせねばならん。

そして、リスラスのアビリティで傷を治癒。

傷口から流れ込んだ呪文を封じ込める事が目的だ。

その方が確実性が増す。

これが私の立てた仮定だ』

ふうむ……と、ザックは顎をつまんで目を閉じる。

意外にも長いまつげに、紫苑は思わず見とれてしまった。

今更だが、『使徒』はみんな整った顔立ちをしていた。

三人以外の『使徒』は、あの部屋で見たときにそう思った。

ザックは、アローデイスやルナセルの二人とは違った美しさだが、やはり綺麗な顔つき。

「紫苑？」

ザックがふいつと顔をのぞき込んできて、紫苑はゴクリと唾を飲んだ。

慌てて顔の前で両手をぶんぶんと振る。

「いや、なんでもないよ!!  
じゃ実行しようか」

ザックは不思議そうに首を傾げかけて、頷いた。

「そうだな。」

アローデイス、ルナセル、準備はいいか？」

『ああ』

「いいよお〜」

ルナセルは胸の前で手を組むと、静かに目を閉じた。

教会で祈りを捧げる美少年のような姿に、紫苑はホウとため息をついた。

そこにアローデイスの厳しい声が刺さる。

『何を惚けている？』

間抜けな顔になっているぞ』

「うっ、失礼な」

ムウツと口を尖らせてカードを睨むが、カードは全く変わりなくぼわぼわと光っている。

『始めてもいいか？』

「……うん」

紫苑が頷くと、アローデイスは一呼吸おいて、チェロを奏でるよう



な静かな声でつぶやく。

『繁茂する生命、その強さを刻み込む植物よ。  
我が名に従い、服従せよ』

紫苑はスウツと息を吸い込むと、アローデイスの言葉を復唱する。

「繁茂する生命、その強さを刻み込む植物よ。  
我が名に従い、服従せよ」

「【ヒーリング・スター】」

ルナセルが囁くように言っで、その後も紫苑にはどこの国の言葉かも判別できない呪文を詠唱し続ける。

ルナセルの体が浅葱色に光を纏った。

その光は小さな玉となり、ルナセルの体を離れ、意識を失っているリスラスの全身を包み込んだ。

みるみるうちに吹き飛ばされた時についたであろう傷がどんどん塞がっていく。

傷のあった場所には、若さがうかがえるみずみずしい肌があった。

### 3章・【ザ・リーフ】？

「うっ、うっ……」

形のいい眉がギュッと寄せられ、ふっくらした唇がづめき声を漏らした。

まぶしそうにうっすらと瞳が開く。

紫苑がのぞき込んだその瞳は、心なしか先ほどより澄んだ色をしていた。

リスラスは多少焦点の合っていない瞳を揺らしながら口を開く。

「ここは、あ……ザックさん」

その目がザックを捉えて、大きく見開かれる。  
驚いた顔が、一気に歪んだ。

「僕、僕は……」

なんて事を……」

頬を伝った一粒の涙が、月の光を浴びてキラリと光る。

それはまるで、深海に眠る真珠のようだった。

ザックは華奢なその肩に、少しためらうような素振りを見せてから、まるで壊れ物を扱うかのようにそっと手を置いた。

リスラスは伏しがちだった瞳をゆっくり上げた。

ザックは力強く頷く。

「お前は悪くない。

操られていたんだ、仕方ない」

いつもの快活で太い声ではなく、幼子をあやすような優しい響きを含んだザツクの声。

リスラスの目に突然涙がにじみ出してきた。

膝を抱えて声をこらえて泣くリスラスの体を、ザツクはそっと抱きしめていた。

「紫苑お兄ちゃん」

耳元で囁くのはルナセルの声。紫苑が振り返ると、険しい顔をしたルナセルが草原の方を無言で指差した。

どうやら、二人だけにしておこうということらしい。

察した紫苑が頷くと、ルナセルは足音も立てずに月明かりに照らされた草原に向かっていく。紫苑も小さなその背中を追ったのだった。

「リスラスはね、僕の友達だったんだよ」

草原のまん中付近、不意にルナセルはくるりと振り返って悔しそうに言った。

紫苑を見据えるその表情は、月光に照らされているせいか、いつもより大人びて見えた。

「リスラス以外にも、『使徒』の中には子供の外見をした子が結構いて、その子達もリスラスみたいになっちゃってるのかな……」

紫苑にはその答えを言う事はできなかった。

と言うより、言う権利がなかった。

いくら侑梨に欺瞞されたとはいえ、『使徒』を解放した主犯は紫苑自身だ。

もし、紫苑が相模やアローデイスの言いつけを守り、あの部屋の扉を開けなければ……。

もし、侑梨の言葉を鵜呑みにせずに、誰かに相談をしていたなら……。

人生に“たられば”はないが、もし、紫苑が『使徒』を解放しなければ今も封使館で三人と相模と五人で慣れないシチュエーションに戸惑いながらも、穏やかな時を過ごしていたのだろう。

紫苑は重い口を開く。

### 3章・【ザ・リーフ】？

「ごめんね……」。

僕が、『使徒』を解放したりしなければ、ルナセルもリスラスも傷つくことなかったのに」

紫苑の目から、予期せぬ雫がこぼれた。

自分に泣く権利なんてものはない事なんか理解している。

紫苑は慌てて目の下を服の袖で拭った。

そしてルナセルに笑顔を向けた。

「僕なんか、封使館に来なきゃよかったんだよ」

「……ちつ、違うよ!!」

ルナセルはぶんぶんと首を振る。

首が左右に振れるその度に、金色の髪が、淡く、まぶしく色を変える。

「紫苑お兄ちゃんが来てくれて、僕は嬉しかった」

「でも、僕はリスラスを傷つけてしまった」

紫苑が俯きかけたその時だった……

『……はあ』

下の方から、呆れたようなため息がつかれた。

紫苑はズボンのポケットからアローデイスのカードを取り出す。

「なんでため息なんだよ……」

闇の中でぼんやりと蛍のように強弱をつけて瞬くカードは、もう一つ大きなため息をつくとき、アローデイスに戻った。見事な銀髪が、同色の月光の下でダイヤモンドのように光る。

「何をお前は悲劇の主人公ぶっているのだ」

「え？」

アローデイスの言葉の意味が飲み込めず、紫苑は自分より少し高い位置にあるその顔を見上げた。相変わらず高飛車な表情で見下ろしてくるアローデイスは、先ほどまでの苦しげなようすは微塵もない。

「何を悲観的に考えているのかと聞いている」

「悲観的って……？」

アローデイスの涼やかな瞳で見つめられて、紫苑はどきりとする。

「確かに、お前が『使徒』を解放しなければ、今こうなっていないな  
かった“かもしれない”」

アローデイスは語尾を強く発音する。

紫苑は首を傾げた。

「……“かもしれない”？」

「ああ」

アローデイスは一つ頷くと、続きを説明する。

「仮にだ、お前が使徒の部屋に行かなければ、あの少年は力づくで『使徒』を奪っていっただろう。」

そして我々は後からこの事を知り、リスラスと対面する。

お前が使徒の部屋に行こうが行くまいが、なんら変わらん。そついう楽観的な考えはできんのか？」

その言葉に、紫苑はハツとした。

### 3章・【ザ・リーフ】 - 記憶 -

昔……紫苑がまだ幼稚園に通っていた頃、一度だけ封使館に行った事があるらしい。

当時の記憶はぼんやりしていて、紫苑は途切れ途切れにしか覚えていない。

『おじいちゃん？』

源一郎の部屋の扉を紫苑は開ける。

初夏の頃だったのだろう、窓から煌めく陽光が差し込んでいたのが印象に強く残っていた。

源一郎はその窓に向かい合うように、扉に背を向けて座っていた。大きな背中がぐるりと椅子ごと回り、源一郎の血色のよい顔が紫苑の姿を認めて緩んだ。

『紫苑か……おいで』

腰をかがめて両手を伸ばす源一郎の胸に紫苑は飛び込んだ。

着古したクリーム色のカーディガンからは、焼きたてのシフォンケーキのような匂いがした。源一郎は紫苑の両脇に手を差し入れて、自分の膝に座らせた。背中から、紫苑より少し高い体温が伝わってくる。

『おじいちゃん、あれなあに？』

『ん……？』

紫苑が指差したのは、大きな机の左端に置かれた写真立てだった。



一般的には、もちろん写真を入れるのだろうが、そこに入っていたのは、三行の文字が書かれた白い画用紙。

源一郎は朗らかな笑顔を浮かべながら、写真立てを手に取って紫苑に渡す。

『それはな、高杉晋作という昔の凄い人が言った言葉だよ』

『たかすぎしんさく?』

当時の紫苑の頭は、まだ漢字変換機能が作動しておらず、全てひらがなで発音された。

『なんて書いてあるの?』

『おもしろき』

『ことも無き世を』

『おもしろく』

『?どーいう意味?』

紫苑は首を傾げると、源一郎を見上げた。

源一郎は優しく微笑んで答えた。

『つまらないなーとか、楽しくないなーって事でも、別の見方から考えたら、楽しさが見つかるって事だよ』

『いい言葉だね。』

僕も幼稚園嫌だけど、別の見方してみるよ』

源一郎はその返事の代わりに、紫苑の頭を筋張った手で優しく撫で

た。

それはまるで“がんばれ”と言ってくれているようで、紫苑はその心地よさに甘えたのだった。

初夏の昼下がりに、忘れられない記憶……。

### 3章・【ザ・リーフ】？

「おい、意識はあるか？  
立ったまま寝るなんて人間離れした特技を持つてるんじゃないだろ  
うな？」

嫌みらしく言われるアローデイスの声で、紫苑は懐かしい記憶の淵  
から呼び戻された。

何故あんな懐かしい記憶が蘇ったんだろう？

多分、アローデイスに言われた言葉の本質が、昔教えられた名言と  
似ていたからだ。

今の紫苑は高杉晋作の名前くらい一般常識として知っているし、当  
時祖父が教えてくれたその意味は随分わかりやすく噛み砕かれてい  
た事も知った。

「おもしろきことも無き世を  
おもしろく」

噛みしめるようにつぶやくと、アローデイスはちょっと面食らった  
ような顔をした。

だが、すぐに笑みがこぼれる。

「……………源一郎」

「え？」

聞き取れるかギリギリの音量で囁かれた声に、紫苑は聞きなおした。  
アローデイスは柔和な微笑みを紫苑に向けた。

「源一郎の好きな言葉だ」

過去を懐かしむように、アローデイスは天を仰ぐ。  
ルナセルも横でニコニコしている所を見ると、どうやら彼もその言葉を知っているらしい。

「源一郎は、我等のあの荒んだ世界が好きだった」

「……うん」

何故かくすぐつたくなって、紫苑も空を見上げる。  
天の中央に位置する満月は、気高く、孤高に凜と澄んだ光を放っていて、改めてアローデイスは月の『使徒』なんだなと、頭ではなく心で理解した。

「僕……世界を戻すよ」

「紫苑お兄ちゃんにならできるよ。  
だって、僕等も一緒じゃない」

無邪気に笑うルナセルの言葉が素直に心に染みる。  
アローデイスは無言だったが、そこからは肯定の意志が感じられた。

「……さて」

しばらくして、アローデイスが視線を真つすぐに戻した。  
銀の瞳は、依然として変わらず冷たい色を宿していた。

「夜営の準備だ、今日はここで休むぞ。  
夕飯の支度もせねばな」

淡々と告げられる業務連絡に、紫苑とルナセルは顔を見合わせてクスクス笑った。

### 3章・焚き火の周り？

紫苑とルナセルが集めてきた薪にザックが火を熾し、アローデイスがアビリティで立派なテントを三つ作り出したのは、それから一時間後の事だった。

紫苑、ザック、アローデイス、ルナセル、リスラスの五人は、ぱちぱち爆ぜる火の粉をあげる焚き火を囲んで腰を下ろしていた。

薪を集めている最中にルナセルが仕留めた鹿の肉を夕食にした後、一同はリスラスの話聞くべく大人しく座っていた。

「あの時、体がフワツて浮き上がる感じがして、何か旋律みたいなのが聞こえてきたんです」

ぽつりぽつりと話し始めたリスラスは、さっきまでの大人びた雰囲気は全くない。

ちよつと内気で、穏やかで、声はオカリナのように優しく響く、普通の気の弱い少年だった。

「……………それで？」

その隣にあぐらをかいて座っているザックは、続きを促す。

リスラスは内容を整理しているのか、唇をへの字にして黙ってからゆっくりと開く。

「それで、体中にだんだん旋律が……侵入してくるような感じがして、目の前が暗くなって、それでその……………」

「気づいたらここにいて、私達にグランドアビリティを使ったという訳か」

アローデイスの鋭い指摘に、リスラスはビクツと肩を跳ねさせた。指摘した張本人は、何故驚かれたのか、不思議そうな顔で思索していたが、理由は本人以外の誰もが気づいている。

アローデイスの言葉自体は間違っていないのだが、その口調が余りにも辛辣なのだ。

紫苑はもう慣れてしまったが、今のリスラスは先ほどまでとは違う。腹を空かせた狼の前にうっかり飛び出してしまった子ウサギのように、ふるふると震えている。

ルナセルはクスリと笑いながら、リスラスにその笑顔を向けた。

「大丈夫だよ、アローデイスは怒ってる訳じゃないから」

リスラスは不安げにこくこくと頷いたが、完全にバリアを解いた訳ではなさそうだ。

ザックが真剣な目で紫苑を見据えた。

「佐伯侑梨………といったが、そいつ。一体何者だ？」

「わからない」

紫苑は正直に述べる。

今日会ったばかりで、二言三言会話しただけの間柄だ。

そんな短時間で相手の本質を探れるなど、エスパー以外にありえない。

生憎ながら紫苑は至って普通の人間だ。

そんな能力は持ち合わせていない。

「あの………僕、皆さんにご迷惑を………」

俯くリスラスに、紫苑は微笑みかける。

「気にしないでよ。」

やりたくてやった訳じゃないんだから」



### 3章・焚き火の周り？

紫苑の言葉に、リスラスはおずおずと俯いた。

感じなくていい責任を感じてしまっているようだ。

いい子なんだな、と紫苑は思った。

リスラスは素直で、優しく、とてもいい性格をしている。

そんな子に、こんな責任を感じさせている侑梨が許せない。

場に充満する気まずい沈黙を破ったのはアローデイスだった。

「済んだことは置いておこう。今更どうにかなるものではないしな。それより、これからだ」

一同の注目はアローデイスに集まる。

リスラスもおどおどと、困惑しながらアローデイスを遠慮がちに見上げていた。

アローデイスは全くその事など気にしていないかのように続ける。

「我々はこれからどこへ赴き、何をすればよいのか。それが最優先で解決すべき問題だろう」

「ああ、その意見には賛成だ」

「僕も」

ザック、ルナセルは同意の言葉を発する。

リスラスの表情ばかり気にしていた紫苑は、そのタイミングを逃してしまい、アローデイスが不機嫌そうな顔で紫苑の方を見てきた時、大きく首を縦に振った。

アローデイスはそのまま視線をリスラスに向ける。

条件反射か、リスラスは小さく首をすくめた。

「リスラス、お前に何か考えはあるか？」

ザックが優しく問う。

「あう……え、えと……」

「言いたいことはつきり言っただな。

私の怒りが爆発する前に」

「……ツ!!!」

冷やかなアローデイスの視線と言葉の合わせ技に、リスラスは声をなくす。

ふるふる震えるリスラスを見て可哀想になった紫苑は、アローデイスの肩に触れた。

「なんだ？」

仏頂面で紫苑までもを睨みつけてくるアローデイスに、紫苑はあくまでも大人の対応で、優しく声を発した。

「アローデイス、それはもはや脅迫になってるから」

「脅迫ではない。忠告だ」

イライラモードのアローデイスをびくびくとうかがいながら、リスラスの視線は焚き火と紫苑を行ったりきたりしている。

紫苑はできるだけ優しくそうに見えるであろう笑顔を作って、リスラ

スに微笑んだ。

リスラスが少しだけホツとした素振りを見せて、紫苑も胸を撫で下ろした。

「あの、僕は……」

横目でアローデイスを盗み見しながら、がんばって発言しようとするリスラスに、紫苑はギョツと拳を握った。

心の中での応援が、表に出してしまった形である。

ふと見ると、ザックもルナセルも拳を握りしめていた。

### 3章・焚き火の周り？

リスラスは何度か深呼吸をして、意を決したように堂々と顔を上げた。

「僕はここに飛ばされる直前に、町のようなものを見ました」

「町……」

よほどイライラしているのか、人差し指で自分の膝をコツコツと弾いていたアローデイスは、リスラスを見る。  
「言うか睨む。」

案の定、リスラスはビクツとして俯きかけたが、拳をきつく握って、アローデイスを見つめ返した。  
「ザックとルナセルが、驚きで目を見張る。  
たぶん紫苑も同じような顔をしていることだろう。」

リスラスの頬を伝った汗が、焚き火の揺らめきに合わせて艶やかに光る。

「はい、町です。人間らしき人の姿も見えました。そんなに大きな町ではなさそうでしたけど、そこで情報収集を試みてはど、どうでしょうか!？」

最後などは、もう叫ぶような感じになっていたが、はっきりと自分の考えを言い切った。

しかも牙を剥く狼に向かって。紫苑の心はリスラスにスタンディング・オベーションをしていた。

言い切ってから、思い出したようにアローデイスから視線を逸らし、再びおどおどするリスラスはちらちらとアローデイスを盗み見てい

る。

アローデイスは深いため息をついた。

「やればできるではないか」

突き放すような冷たい口調だったが、紫苑にはそれがアローデイスなりの精一杯の褒め言葉だったのがわかった。だが、悲しきかな。

アローデイスの褒め言葉は、リスラスによってあきれたと捉えられたようだ。

リスラスは泣きそうな顔になって、俯く。

後でフォローを入れなければと、紫苑は責任感に駆られた。

「だが、妙案だな」

「ん……………」

小さくつぶやかれたアローデイスの言葉を、ザックが聞きなおす。

「ほら、そういう事は大きな声で言ってやれ。全く、素直じゃない」

アローデイスは怪訝な顔をしたが、すぐに元の表情に戻る。

そして何度かわざとらしい咳払いをしてから、先ほどより少しトーンの大きい声で述べる。

「町で情報を集めるといのは、“妙案”だな」

「……………!!」

びっくりした顔をしたのはリスラスだ。

怒られていると思っていた所を急に褒められたら、誰だってそうなるだろう。

呆然としているリスラスに、隣からルナセルがそつと言う。

「アローデイスは、リスラスの考えが“妙案”なんだって言ってるよ」

声も上げられないのか、ただ頷くリスラス。

### 3章・焚き火の周りで？

と言っか、これほどまでに恐れられているアローデイスとは、一体……。  
悪意はないのに、素直じゃないばかりに誤解される隣に座った男を、紫苑は哀れみの目で見ていたらしい。

「その巢から落ちた雛鳥を見るようなら目で私を見るな」

アローデイスは眉間に一層深いシワを刻んで、紫苑を睨む。  
バレてたか、と紫苑は慌てて目を逸らした。

ザックがアローデイスの気を逸らせるように、ゴホンと咳払いを一つついてアローデイスに話しかける。

「まあ、でも俺も情報を集めるといっ件については、いい事だと思う。俺達はこの世界について、知識が足りなさすぎる」

「うん、同感」

ルナセルがいつもより少しだけ低い声で言うと、異形の物を見るかのように首だけを動かして森をぐるりと見回した。

「この世界がどういう仕組みになっているのかもわからない。なんだか、気持ち悪い世界だよ。なんて言うのかな……、均衡が保たれていないって感じ」

紫苑がリスラスを見ると、あちらも紫苑をうかがっていたようで、びくりと肩をすくめた。

そんなに怖い顔をしていたのか気になって、紫苑は頬を両手で包み

込むように触れた。

「そうだな。ここまで構成要素が支離滅裂だと、吐き気まで覚える」  
アローデイスは苦々しげに言い放つ。

構成要素だとか、なんだとか、紫苑には全くわからない話題に移って、取り残された紫苑は、ぼうつと焚き火の揺らめく炎を眺めていた。

この世界も、季節は春のようだ。

さっきまでは穏やかな陽光が降り注いでいたが、アローデイスのアブリティで夜に変わると、夜の冷え込みがグツと押し寄せてきた。話が始まる前にザックが手渡してくれた毛布を体にきつく巻きつけると、少しは寒さが和らいだ。

「予想される次の『使徒』は……」

会話するみんなの声が、意識の淵に押し寄せては沈んでいく。揺れる炎に顔を照らされ、紫苑は襲ってくる眠気に抗えないほどに強力な疲れに翻弄されていた。

目の前の炎が揺れているのは、錯覚だ。

正しくは紫苑の頭が前後左右に揺れている。

ずーっと前に深く沈み込んで、ギリギリの所でかくんと首がブレーキをかけて現実呼び戻される。

何回かそれを続けた後、紫苑の頭は、何か温かく柔らかい物に触れた。

重いまぶたを残った気力を振りしぼって持ち上げると、不機嫌そうなアローデイスの顔が、間近にあった。



### 3章・焚き火の周り？

涼やかな銀の瞳、完璧なラインの鼻筋、赤味の少ない薄い唇。目の前にアツプで迫ったこの世の物とは思えない美貌に、紫苑は叫んでしまう。

「うわああ!!」

すると、アローデイスは目を吊り上げて、紫苑の後頭部を平手でスパーンと打った。

小気味よい爽快な音がした自分の頭を押さえて、紫苑はアローデイスを睨んだ。

「いったっ！何するんだよっ！」

「黙れ叫ぶな。鼓膜が破れる」

じんわりにじんだ涙を、紫苑は指先でそっと拭った。

アローデイスは紫苑の方を見ようともしない。

ザツクに提案をするように、目をじっと見てアローデイスは言う。

「今日はこのくらいにしよう。とりあえず明日からの行動は大方決めたんだからな。そろそろ休んで、明日に備えることにしないか」

「ああ、そうだな。今日は色々あって、みんな疲れているだろう」

ザツクの言葉を引き継ぐように、ルナセルがパンパンと手を打った。

「じゃ、今日はこれでおしま〜い。リスラス、寝よう」

ルナセルが立ち上がって、両手を頭上に伸ばし、ぐーんと伸びをしながら言うと、遠慮がちにリラスも立ち上がった。

「あ、う、……うん」

二人は連れ立って、焚き火に一番近いテントにもそもそと潜り込んでいく。

「俺も……寝るかな」

ザックが立ち上がって、焚き火から一番遠いテントに入っていった。紫苑ももぞもぞと立ち上がるが、焚き火の前から動こうとしないアローデイスを見下ろして聞いた。

「アローデイスは寝ないの？」

アローデイスは焚き火に顔を向けたまま、紫苑を振り返ろうともせずぶっきらぼうに答えた。

「見張りだ」

「あ……、そう……」

会話が途切れる。

紫苑は気まづくなって、多少無理をして明るい声を出した。

「そっ、そうだ！後で僕が交代する……」

「必要ない」

冷たく言い放つアローデイスの態度に、紫苑が拗ねかけた時、アローデイスがふいっと顔を紫苑の方に向けた。

「私は普段からあまり睡眠時間を必要としないタイプだ。

それに、人に寄りかかって意識を飛ばすくらいなら、大人しく寝て体力を回復するんだな」

そう言つて再び背を向けたアローデイスはそばにあった小枝を炎に投げ入れた。

紫苑は口元が緩むのを感じる。

「全く、素直じゃない」

「ん？なんか言つたか？」

紫苑はアローデイスがギリギリ聞こえないボリュームでつぶやくと、アローデイスの質問に首を振る。

### 3章・焚き火の周り？

「別に！なんでもないっ！」

紫苑は満面の笑みを放つと、首を傾げているアローデイスを残して、テントに入った。

テント内では、ルナセルとリスラスが穏やかな寝息を立てて眠っている。

三つ用意された寢床のうち、空いている一つに体を横たえたと、驚くほど呆気なく、眠りの世界に引き込まれていった。優しく、柔らかく、どこか穏やかな心地よさだった。

その頃、一人残ったアローデイスは、焚き火を眺めながら考え事をしていた。

それは……紫苑の事。

自分に突つかかってくるかと思えば、打たれ弱くて、どこか優しすぎる所がある。

難儀な性格だ、と囁く心の声は、自分の事などは柵に上げる。自分には、あいつを護らなくてはならない“義務”がある。

アローデイスはいつになく、正義感にも似た使命感に突き動かされていた。

「全く、世話の焼ける……」

揺れ動く炎はそれを肯定しているかのよう。

アローデイスは周囲の物音に注意を払いながら、自分の小さな主人<sup>マスター</sup>の事を考えていた。

#### 4章・町へ？

白いもやがかかったような遠い意識の中、紫苑の耳は聞き覚えのある声を捉えていた。

「あつ、あのう………」

ふるふると震えるその声は、どうやら紫苑の上空から降ってきているようだ。

「し……紫苑さんっ！」

「うわあっ!!」

テント内に叫び声が響き渡り、紫苑は寝床から跳ね起きた。目の前には、怯えきって逃走準備が完璧に整っているリスラスがいた。

子リスのように紫苑を警戒するその姿を見て、ほっとため息をつく。

「リスラスか、おはよう」

「……おはようございます」

妙なイントネーションで挨拶を返すと、リスラスは紫苑から目を逸らし、逃走する構えをといた。

「アローデイスさんが……、朝食の準備ができたから、早くこいと………」

それだけの事を説明するのだけに震えるほど緊張されては、自分が悪いのではないかという錯覚に陥る。紫苑はできるだけ友好的に見えるであろう笑みを浮かべ、リスラスに礼を言う。

「わざわざありがとう」

「いついえ!!.....では!」

疾風のようなスピードで、リスラスはテントから出て行ってしまった。

入り口にかけられた布が、勢いよく跳ね上げられたせいで、テントの上部にかかって戻ってこない。

紫苑はその隙間から、燦々と降り注ぐ陽光を見たのだった。

「.....よし」

何がよいのか自分でもわからない言葉をきっかけに、紫苑は寢床を抜け出し、テントから這い出た。

「よお!おはようさん」

「紫苑お兄ちゃん、おはよー」

朗々とした声と、はつらつな笑顔に出迎えられて、紫苑は答えるようにほんのちよつと片手を上げた。

焚き火のそばに座っていた二人に紫苑は近づいていく。

焚き火にかけられた小さな片手鍋を銀のお玉でかき混ぜているザックの左隣に腰を下ろした。どうやらシチューを作っているようだ。豊かなミルクの香りが、紫苑の鼻を刺激する。

腹の虫が自己主張をするようにギューツと鳴いた。

ザックは一瞬びっくりした表情を浮かべるが、すぐにその顔はほころんだ。

「素直な腹の虫を飼ってるな」

「あはは……」

照れ笑いをしながら髪をかく。そして、ふとその時に気がついた。

「あれ、アローデイスは？」

ああ、とザックは鍋をかき混ぜる手を止めて蓋をかぶせた。

#### 4章・町へ？

「あいつなら川へ水を汲みに行ったぞ」

「そうなんだ……」

紫苑は周りを見回してアローデイスがいないことを再確認すると、ザツクの顔に自分の顔を寄せた。

「アローデイス、昨日の晩寝たのかな？」

ザツクは首を傾げる。

何か考え込むような顔をして、ふうむと唸った。

「あの後三時間ほどしてから、アローデイスに交代を申し出たんだがな。きっぱりと断られてしまった」

紫苑は顔をしかめる。

昨日のリスラスとの闘い、リスラスのグラウンドアビリティである【サテライト・ゾーン】によって、アローデイスはかなりのダメージを受けていた。

カードに戻って多少は体力を回復したのだろうが、あの時の苦しみ方を見たら、やはり心配せざるをえない。

紫苑は後悔の色を浮かべる。

「やっぱり、無理にでも代わった方がよかったかな……」

「見くびるな、あのくらいどうとということはない」



冷え切った氷のような超低温な声に、紫苑はハッと振り返る。そこには眉間にシワを刻み、目の下にクマを作ったアローデイスが立っていた。

肩がいつもより下がり気味で、大分疲れているようだ。

アローデイスは、焚き火を挟んで紫苑の真向かいにどさりと座った。

「やっぱり疲れているね」

ザックアローデイスの隣にルナセルがちょこんと座り、ルナセルとザックの間にはリラスがおずおずと入り込んだ。

アローデイスはクマのせいでいつもより鋭く見える眼光を放ちながら、紫苑をつと見据えた。

「案ずるな。どこかの誰かのように、話の途中で意識を手放すへまはしない」

「……………そのどこかの誰かって、僕の事？」

紫苑がむっとして聞き返すと、アローデイスはその暗い瞳を小馬鹿にしたように伏せた。

「自分の胸に手を当てて、神にお伺いを立てるんだな」

態度とは裏腹にちょっとからかうような口調になって、紫苑は多少ほっとした。

ザックがくすくすと笑いかみ殺しながら、リラスの持ってきた木の器にシチューをよそった。

手渡されるシチューは、目の前でほわほわと穏やかに湯気を立てている。

「うわぁ……美味しそう。これってザックが作ったの？」

「いや、作ったのはリスラスで、俺は最後にかき混ぜる役を担っただけだ」

「リスラスが……!？」

びっくりしてリスラスを見ると、彼は白い肌を朱色に染めて俯いた。

#### 4章・町へ？

その反応を見れば、ザツクの言葉の真偽は明らかだ。  
紫苑は感心して声を上げた。

「へえ〜凄いなあ……僕には料理なんてできないよ。誰かに教わったの？」

リスラスは紫苑を上目遣いで一瞬見上げると、再び地面に視線を落とした。

「……はい、昔……」

まだ緊張が解けないのか、つつかえつつかえ話すリスラスを見て、紫苑はアローデイスの様子を窺った。

また昨日のようにイライラしているのではないかと思案しての事だった。

しかしアローデイスはイライラする素振りは全く見せず、木のスパーンで上品にシチューを口に運んでいた。

その様子に安心しつつ、紫苑もシチューを一口飲んだ。

「おっ、おいしい！」

口に入れた瞬間に感じる、濃いミルクのコク。

具材は、人参、ジャガイモ、トウモロコシ。

シンプルで、ぱつと見ただけではありきたりなシチューだが、水っぽすぎず、濃すぎず、ほどよい喉ごしが癖になる味だ。

「おお、こりゃ絶品だ！」

「さすがリスラスだね」

ザックとルナセルの素直な褒め言葉に、リスラスは更に頬を赤らめたが、その口元は微笑んでいた。

ただ一人、何も言わないアローデイスだが、その手が比較的早いスピードで口と器を往復している事から、味の良し悪しは伝わってくる。

「喜んで頂けて……よかった、です」

シチューのように深い笑顔を見せたリスラスと、少しずつ距離が近くなっていつている気がした紫苑は、リスラスに色んな事を質問した。

持っているアビリティ、好きな事、嫌いな事、その他にも色々……。

最初は戸惑いがちだったリスラスも、大分慣れてきたのか、だんだん一つの質問に対する答えが長くなっていった。

そして朝食が終わる頃、紫苑とリスラスはすっかり打ち解けていたのだった。

#### 4章・町へ？

「紫苑」

「ん？」

アローデイスが話しかけてきたのは、朝食が終わり、各自焚き火の後始末やテントの片付けをしていた時だった。

自分が寝たテント内の毛布を畳んでいた紫苑は、腰をかがめて入ってくるアローデイスに座れる場所を空けようと少し奥につめた。

すまないな、と断って、アローデイスはその場にあぐらをかいて座る。

「どうしたの？」

尋ねる紫苑の問いには答えず、アローデイスは目の前に古びた地図を広げた。

画用紙四枚分くらいの大きさの羊皮紙に描かれているのは、海と大陸。  
随分古い物なのだろう。

描かれた当初は美しかったと推測される羊皮紙は、日に焼けて黄ばんでいて、端っこの方には裂け目があった。

「この世界の地図らしい」

「……………この世界の？どうやって手に入れたの？」

「リスラスの……………これはアビリティと言うより、特殊能力だな。あいつは動物と会話ができるという一風変わった特技を持つ

ている。さつき鷹がきたんだが、そいつがこの地図の存在を教えてください、らしいぞ」

らしいぞ、の部分を強調して発音するアローデイスとしては、半信半疑といった感じなのだろう。

だが紫苑は、リスラスならありえると本気で思った。

あのまったりした性格、人見知りだが慣れれば心を許してくれる。

リスラスが、細い指先に小鳥を止まらせ、そのさえずりに耳を傾け時折頷く。

そんな光景は、容易に想像できるものであった。

「それはいいとして、だ」

アローデイスの細く長い指が、地図の一点をトンと突いた。

地形に合わせてカラーで色分けがされているらしい丁寧な地図は、その場所を深緑色で塗っていた。

その横に、何かミミズのような形の文字が書かれているが、紫苑には読む事ができない。

紫苑はアローデイスを窺った。

「その文字はなんて書いてあるの?」

アローデイスは答えの代わりに、紫苑の額に手を当てた。

押し当てられた手のひらはひんやりと冷たく、氷のような感じがした。

アローデイスの声が、低い響きを帯びる。

### 【トランスレーション】

不思議な呪文が唱えられたかと思うと、じんわりとした温かさを額

に感じた。

それは皮膚を簡単に突き抜け、じわじわと脳内に入り込んでいく。

紫苑は、脳が訴える不快感に、思わず目を閉じた。

頭の中がちや混ぜにされているような感覚。

前のめりに倒れそうになる紫苑の体を、アローデイスは空いている方の手で支えた。

#### 4章・町へ？

ほんの十秒ほどで、不快感は消えた。

紫苑は固く閉じた目をおそろおそろ開けると、アローデイスの白いローブが視界を全て覆っていた。

アローデイスが紫苑の肩と額からゆっくり手を離し、紫苑は不安定に傾いたその体を自分の力で支える事ができた。掠れた声で紫苑はアローデイスに尋ねる。

「……………何したの？」

「見てみる」

アローデイスは地図を指差す。紫苑はもやもやした気持ちをなんとか飲み込んで、言われた通りに地図に視線を落とす。

「あれ？」

紫苑は、その地図に違和感を感じた。

その違和感の理由はすぐにわかった。

ついさっきまでミミズのような文字が、紫苑がよく慣れ親しんだ母国語、日本語に変わっていたのである。

目をパチパチさせている紫苑に、アローデイスが説明する。

「さっきのは【トランスレーション】。私のアビリティの一つで、異国の言葉を術をかけられた者の母国語に翻訳する事ができる」

「じゃあ……………英語のテストなんで、勉強しなくても百点じゃん!!」



「心配無用だ。あちらに戻ったらいの一番に解除してやる」

紫苑の歓喜は、アローデイスという名の濁流に押し流されてしまった。

がつくりと肩を落とす紫苑に、アローデイスは含んだ笑みを向けた。

「いいから見ろ、余計な話は後だ」

仕方なく紫苑は地図を見た。

どこかで見たことのある形の大陸。

それは間違いなく紫苑の住んでいる、地球のそれだった。

ユーラシア大陸、北アメリカ大陸、南アメリカ大陸、オーストリア大陸、アフリカ大陸、南極大陸。

中学校の地理で何度も目にした六大陸が、一寸の狂いもなく配置されていた。

だが、日本列島は存在しない。おおよそ韓国が位置していると思われる場所の左側は、広く群青色に染まっている。

母なる海、太平洋だ。

アローデイスが指差したのは、ユーラシア大陸の中国がある辺り。

深緑色で塗られたそこは、森であるらしい。

『植物の森』

黒いインクでガリガリ引つかくようにして綴られた文字。

それがこの森の名前らしい。

「何か気づかんか？」

「ん？」

アローデイスの唐突な問いかけに、紫苑は首をひねった。

気づくこと……大陸の並びが、自分達の世界と一緒だということ。

だが、そんな簡単な事をわざわざ確認しないだろう。  
紫苑は森の地名を凝視した。

#### 4章・町へ？

「うーん……」

残念な事に、紫苑の頭脳ではその問いかけに答える事ができなかった。

唇を横一文字に結んだ紫苑を見て、アローデイスはがっかりしたようにため息をついた。

「……もういい」

あからさまな呆れ顔でアローデイスは再び『植物の森』の地名を指差した。

「リスラスの司っている物の名を言ってみろ」

「え………？【葉】でしょ」

紫苑が答えると、アローデイスは眉根を寄せた。

何を言っている？と無言の否定が紫苑にグサグサと突き刺さる。

「誰が教えたのだ？」

厳しい口調に、紫苑は恐怖を感じる。

少しだけだが、リスラスがアローデイスを恐れる気持ちが理解できた。

「……ザックだよ」

やはりな、とアローデイスは納得するように頷いてから、紫苑を真剣な眼差しで見た。

「いいか、ザックは一見しっかりしているように見えて、かなり大雑把な奴だ。あまり情報は信用するな」

「あ、そうなの？」

紫苑はその事を脳裏に刻みつけ、新たに生まれた疑問をぶつけてみる。

「じゃあ何を司ってるの？」

「『植物』だ」

その言葉を聞いて、紫苑の頭に何か閃くものがあった。

「もしかして……この地図」

紫苑は地図に顔を近づけた。

そこに書かれている一つ一つの地名を確認していく。

『クラスウッド火町』

『コー・カーラン寺院』

『チャート練金堂』。

紫苑の脳内の思考回路は、全て繋がった。

まだ仮定の状態だが、紫苑はそれを口に出してみた。

「もしかして……もしかしてだけど、この地名って『使徒』と関係

ある？」

アローデイスの首が、肯定を示す。

「『植物の森』でリスラスと出会った。これが偶然であるのかはわからない。だが、この地名にまつわる『使徒』がいるのは事実だ」

そして……と、アローデイスはついと指を地図の上で滑らせる。

たどり着いた先にあつた地名は、『クラスウッド火町』。

「リスラスが言っていた町とは、おそらくこの事だろう」

ということとは……だ。

「【火】を司る『使徒』がいるって事だね」

「多分な」

アローデイスは地図から指を離し、紫苑を正面から真剣な眼で見つめる。

「その前に、お前に教えておかなければならない事がある」

アローデイスの鋭い眼差しに、紫苑は真剣に耳を傾けた。

#### 4章・クラスウッド火町？

夜営の跡が片付いて、紫苑達は鬱蒼とした森の中を一行で歩いていた。

木々の数は多くはないのだが、少ない木達が目一杯に枝を広げているので、天上の太陽の光が地上まで届かない。

時折、葉の隙間からこぼれてくる微かな陽光がまぶしいくらいだ。吹いてくる風は、そんな陰鬱な景色とは違い、柔らかで乾いた空気を運んでいた。

「クラスウッド火町はこっちで合ってる？」

先頭に立つリスラスは、時々立ち止まり、木や小鳥に話しかけている。

その様は紫苑が想像していた通り、リスラスのイメージによく合ったものだった。

「ありがとう」

礼を述べて、一本の苔むした古木の幹を優しく撫でたリスラスは、再び列の先頭に立って歩き出す。

リスラスの後ろ、紫苑の前に並んでいるアローデイスは、おそらく納得がいかないような顔をしているのだろう。

紫苑にはそれが容易に推測できた。

どれほど歩いたことだろうか。急に目の前の視界がぱつと開けた。瞳の許容量を遥かに超越した、まばゆい光が紫苑の体に降り注ぐ。外へ――出たのだ。

紫苑がそれを理解したのは、森から伸びる一本道の先にある、“そ

れ”を見てからだった。

「――――あれがクラスウツドの火町か」

一番後方に立つザックが、感心したようにつぶやいた。

そう、森からはクラスウツド火町が見えていた。

森から続くのは、舗装などされていない、土がりのままに存在している一本道。

それは緩やかにうねり、なだらかな上り坂になっていた。

その先に見えるのは、見紛う事などない、町だった。

#### 4章・クラスウッド火町？

一本道を上りきって、紫苑達の目の前には、町の入り口。そこから急に、道が花崗岩のような色のタイルで敷き詰められている。

道の両端には、ずらりと並ぶ建物。

大抵の建物は、道と同じ白濁色の石造りで、町全体が単調な色だ。まるで、町が一つの岩から切り出された彫刻のよう。

民家の二階部分に当たると、ベランダに干された色とりどりの洗濯物が目に鮮やかだ。紫苑は町をキョロキョロ見回すのに一生懸命で、立ち止まったアローデイスにぶつかってしまった。

「あいたっ！」

「……………こちらのセリフだ」

アローデイスは首だけを紫苑の方に向けて、じろりと見下ろした。そしてリスラスに視線を向けてから、紫苑達に向き合った。

「ここから先、私の仮説が正しければ、『使徒』がいつ襲ってくるかもわからん状態だ。気を抜くな」

アローデイスの言葉に、みんな緊張した面もちで首を縦に振った。リスラスとアローデイスの位置が入れ替わり、アローデイスが先頭でクラスウッド火町に踏み込んだ。

「わあ……………」

紫苑の口から意図せず言葉が漏れたのは、おそらくイメージが外れ



たからだろう。

『クラスウッド火町』、その名から想像されるイメージは、近くに活火山があり、そのために食料品等の生産量が少ない、荒んだ様子だが、紫苑が勝手に抱いていたそれは、もの見事に打ち砕かれる事となる。

「綺麗な町だねっ！」

ウキウキして朗らかなルナセルの言う通り、クラスウッド火町は、至って普通の町だった。

活火山などは存在しないし、青果店らしき店の軒先には、かごに盛られた色とりどりの果物や野菜がみずみずしい光沢を放っている。行き交う人々には笑顔が溢れ、町全体に活気があった。

「いらっしやい、いらっしやい！今日はきゅうりが安いよっ！！

お、旅の人かい！？寄ってっしてくれ！安くしとくよ！」

腹回りの肉付きがよい、全体的にぽってりして、鼻の下に豊かな口ひげをたくわえた青果店の店主らしき中年男性が紫苑達に話しかけてくる。

冷たい眼差しで店主を見たアローデイスは、無視するのかと思いきや、足を青果店へ向けた。

ザックヤルナセル、リラスはその向かいにある服屋を眺めていて気づいていないようだったので、紫苑は仕方なくアローデイスの後を追った。

#### 4章・クラスウッド火町？

店主は近づいてくるアローデイスを見て、手をすり合わせた。

「はい、いらっしやいませ！」

「別に青果を買いにきたのではない」

その言葉を聞いて、たつぷりと肉がついた店主の顔から、営業スマイルが消える。

途端に無表情になり、店頭に並べてある野菜の位置を替えたりし始めた。

アローデイスはそんな店主の態度の変わりように驚く事なく、服の懐から、金色に光る小さな物を取り出した。

「？」

アローデイスはそれを指で弾き、コイントスのように回し始める。キーンという微かな金属音が耳についたのか、振り返った店主の目が大きく見開かれた。

アローデイスの口元が、ニヤリと意地悪く弧を描いた。

「情報を売ってくれ」

店主の目は、弾かれる金貨に釘付けた。

アローデイスは金貨を一際強く弾いた。

更に高い金属音が響き、店主は我に返ったようにハツとした。そしてアローデイスに視線を向けた。

「なんの情報だ？断っておくが、俺はしがない八百屋の主人にすぎん。王家の内部事情なんか聞かれても答えられんぞ」

「心配するな」

高く弾かれた金貨を、アローデイスはパシッと掴んだ。

「この町の宿屋を教えて欲しいのだが……」

「ああ、その武器屋の角を右に曲がってすぐだ。看板が出てるか  
らわかるだろ」

店主は太く短い指の手をアローデイスに向けた。

アローデイスはその手に向けて金貨を弾いた。

短い腕を伸ばして、器用にそれをキャッチする店主はほくほくと金貨を前掛けのポケットにしまった。

「助かった」

アローデイスは素っ気なく言って、服屋を覗き込んでいる三人に声をかけた。

「行くぞ。とりあえず落ち着ける所を見つけた」

その声にルナセルが面白い物を見つけた時のような満面の笑みで二人を振り返った。

手招きして紫苑を呼ぶ。

「紫苑お兄ちゃん！！見てみて」

紫苑がショーウィンドーに近づくと、様々な形の服が並べられているのが見えた。

「なんなのだ、一体」

ひどく不機嫌な声色でつぶやきながらアローデイスが歩み寄ってくる。

「いや、紫苑の格好は、ちいと目立ちすぎているかもしれないと思ってな」

ザックに言われて、紫苑は自分の服装を見下ろした。

黒いブレザーの制服、赤いネクタイに学校指定の革靴。

対してこの町の人々はというと、中世ヨーロッパの服装。

RPGなどでよく見かける感じだ。

そこから見たら、紫苑は少し浮いているかもしれない。

#### 4章・クラスウッド火町？

アローデイスはザックに、言い聞かせるような口調で静かに話しかける。

「今最優先するべきは拠点の確保だ。とりあえず宿屋へ向かう。買物はそのからだ」

「……わかった。すまない、つい気を抜いていた」

気にするなと言うように、アローデイスは口元に微かな笑みを浮かべて、青果店の店主に教わった方向へと歩き出した。なんだかんだ言って、ザックもアローデイスも互いの事を信頼している。

「ほら、早く来い。路頭に迷うつもりか？」

そんな事を考えていた矢先、アローデイスから厳しい一言。紫苑は気づかれないように小さくため息をついた。

「今行くよー！！」

紫苑は叫んでみんなの後を追った。

#### 4章・【ザ・ファイア】？

「……………いらっしゃいませ」

一行が宿屋の扉をくぐると、正面のカウンターに腰かけ、読書をしていたらしい老人が、年相応な深みのある声で言う。椅子から立ち上がると、その体つきがよく見えた。ひよろりとした痩せた体躯、少しだけ曲がった腰。しよぼしよぼとまばたきをする瞳には、輝きがない。

「泊めてもらいたいのだが」

ぶつきらぼうに告げるアローデイスの言葉に、初めて老人の瞳から感情が窺えた。

喜び、驚き、戸惑い……………そんないくつもの異なった感情が渦を巻く中に、不釣り合いな物があった。

……………恐怖だ。

と言うよりは、怯え。

この老人は何かに怯えているらしい。

何に？誰に？

だがすぐに、老人の瞳からは光が消えた。

「一人当たり、一泊につき銀貨五枚です」

「後払いでも結構か？」

「かしこまりました」

軽く頭を下げてから、老人は紫苑達の顔をまじまじと見た。

元々一重まぶたなのだろうが、顔の皮膚が垂れていて更に細く見える。

「ん？じーさん、俺達の顔になんかついてるか？」

初対面のクセに、馴れ馴れしいザツクの言葉を気にしない様子の老人は、寛大な心の持ち主のようだ。

「失礼ながら、旅の方でしょうか？」

「そうだが……。この町では旅人は珍しいのだろうか？」

アローデイスの問いかけに、老人は一瞬躊躇った。

言うべきか、否か。

それを思案しているらしかったが、アローデイスの厳しい視線に射  
竦められ、黙るといふ選択肢は消え去ったのだろう。

掠れた声を低めて、静かに話し始めた。

「いえ、以前は珍しくもなかったのですが……。ここ最近は、めっ  
きり少なくなりました」

「それって、何か理由があるんですか？」

紫苑が聞くと、老人は困ったように俯いた。

先ほどのように思案しているらしい。

「ご主人」

アローデイスの低い声に、老人はおそろおそろる面を上げた。

「なんでしよう……」

「何か理由があるのであれば、包み隠さず話して頂きたい。滞在する我々としては、不安要素を全て取り除いておきたいのです」

アローデイスの理論に、老人の心はぐらぐらと揺さぶられているようだ。

老人は決心したように顔を上げた。

「いいでしょう」



#### 4章・【ザ・ファイア】？

「数年前からです。陽が沈み、夜になると“魔物”が現れるのです」

「……………“魔物”」

アローデイスが眉をひそめて繰り返すと、老人はゆっくり頷いた。その瞳を見て、紫苑は悟った。老人が恐れていたのは“魔物”だったのだと。

「“魔物”は、夜な夜な現れては紅蓮の焰を身に纏い、町を破壊して去っていくのです」

「焰……………ルフィナか!？」

ザックの発言に、アローデイスは目を見開いて勢いよく振り返り、老人は怪訝そうに眉を寄せた。

「旅の方、あの“魔物”を……………ご存知なのですか？」

ルナセルは誤魔化すように、ぶんぶんと顔の前で両手を振る。その顔は笑っていたが、紫苑はこめかみを汗が伝うのを見逃さなかった。

「いや、そんな事ないですよ!ねっ、アローデイス!」

アローデイスも静かに頷く。

さすがに冷静を装うのが上手い。

「ええ。ご主人、重要な情報をありがとうございます。夜間の外出

は控えるよう注意します」

それがいいと老人は頭を縦に振った。

「お部屋は階段を上って左、突き当たりです。また食事の際はお呼びにあがります」

「いえ、食事は結構です」

アローデイスが丁寧に断って、老人は承知したと深く頷く。ルナセルがリスラスの手を引いて走り出した。

「あつ、ル…… ナセル!？」

「早く部屋を見に行こうよ!!」

満面の笑顔で階段を駆け上がっていくルナセルと、足が絡まるのではないかと心配になるリスラス。

二人の後にザックが続き、その後ろにアローデイス。

最後になった紫苑は、老人に小さく会釈すると、階段を駆け上がっていった。

#### 4章・【ザ・ファイア】？

「何を考えているのだ!!」

部屋に着いた途端、内装を確かめる暇もなく響いた怒声はアローデイスのもの。

それは、ザックに向けられていた。

「あの場で、あの状況で!“魔物”と知り合いであるかのような発言をするなど、無責任にもほどがある！」

「……………」

ザックはシュンとして、アローデイスのお小言を素直に聞いている。大の大人が、まるで子供のように怒られている姿は、紫苑にとってもの凄く面白い光景なのだが、笑ってはいけない。

紫苑は口をへの字にして、顔がにやけないように努力した。

「…………その、浮かんだ事をすぐに口に出す性格をなんとかしてくれ。一度、脳に持っていてから発言しろ。頼むから脊髄で物事を考えるのはよしてくれ」

アローデイスは、疲れたように額に手を当てた。呼吸にもため息が混じる。

給料日前、赤いペンで書かれた家計簿を目の前にしている主婦のようだと紫苑は思った。

(アローデイス、絶対老け顔になるよ)

自分で考えて、アローデイスが顔に沢山小じわを作っている様子を想像した。

「……………プツ！」

思わず吹き出してしまった。

しまった！と思った時には既に遅かった。

突き刺さるアローデイスの冷たい視線。

「……………紫苑……………」

怒りの矛は、どうやら向ける人物を変えられたようだ。

アローデイスの目が更に厳しくなり、紫苑はじりじりと後ずさった。後ろに回した手がドアノブに触れた瞬間、くるりと身を翻し、扉を押し開けて外へと飛び出した。

「じつ、ごめんなさい！」

階段を通り過ぎ、反対側の扉を押し開けた。

バン！と石と木が打ち当たる音がして、中にいた人物はびくりと肩を震わせた。

てつきりバルコニーにでも通じていると思っていた紫苑は焦った。

部屋の中にいたのは、赤毛の少女だった。

一つだけ据え付けてあるベッドに座って本を読んでいた少女は、弾かれたように立ち上がった。

「なんや、兄ちゃん！？」

紫苑は呆気にとられて、思わずぽかんと口を半開きにして立ち尽くしていた。

紫苑の頭の中をループしていたのは、ただ一つ。

――――関西弁だ。

可愛いがどこか気が強そうな少女は、関西弁を喋っている。  
尚もぼんやりしている紫苑に、少女は不愉快そうに聞き直す。

「なんやねん、兄ちゃん！！レディーの部屋にノックもなしに入ってきて！」

その言葉を聞いて、紫苑は我に返った。

#### 4章・【ザ・ファイア】？

「あつ、ごめんなさいっ！部屋を間違えました！！！」

一方的に切り上げて、紫苑は扉をボタンと閉めた。

ダッシュで自分達の部屋に戻ると、アローデイスの怒りはもう収まっているようだった。

「どこへ行っていた？」

「いやあ、ちよっとそこまで」

照れ隠しで後頭部をかく紫苑は、四つ置かれたベッドの二つに仰向けで寝転んだ。

「服を買いに行かないか？」

アローデイスが見下ろしてくる。

紫苑は上体を起こす。

「行きたい！！！」

アローデイスの口元が弧を描いた。

「同行しよう」

申し出てくれたアローデイスと共に、紫苑は部屋を出て行った。

#### 4章・【ザ・ファイア】？

今は――――夜。

アローデイスに買ってもらった物を自分のベッドに広げ、紫苑はにやにやと口元が緩むのを感じた。

「にやにやしおって……気持ちが悪い。そのだらしない口を閉じんか」

アローデイスの悪態も、今は全く気にならない。だって、だって――――。

紫苑は目の前のそれをつつとりと見つめる。

( “ 剣” だよ――――!! )

心の中で、紫苑は歓喜の悲鳴を上げた。

紫苑の前に横たえられたのは、黒い鞘に収められた、片手剣。刃渡りは六十センチほど。

何故、こんな物が紫苑のベッドに置かれているのかというと、それには勿論理由があった。

「 剣が必要だな……」

服を買ってもらって、上機嫌で自分の格好を見下ろしていた紫苑は、アローデイスの言った言葉がよく聞こえなかった。

「え？」

紫苑が顔を上げると、アローデイスはもう一度言い直してくれた。

「お前の護身用に、武器が必要だと言ったんだ」

「買ってくれるの!？」

「ああ」

その瞬間、紫苑はアローデイスに抱きついた。

アローデイスの体が、瞬時に強張るのがわかるが気にしない。紫苑にとって、アローデイスは神に見えていた。

紫苑くらいの年頃の男子なら、一度は剣という物に憧れを抱いた事があるだろう。

アニメにしろ、漫画にしろ、ファンタジーかつヒーロー物要素を含む作品には、格好いい剣がつきものだ。

それは時に『聖剣』や『魔剣』とか呼ばれる偉大な存在であり、莫大なエネルギーを秘めた物であったりする。

それらを振り回し、あるいは腰に帯びた主人公の姿を自分に重ね合わせた事など、それこそ星の数ほどあるだろう。

アローデイスは、抱きついてくる紫苑を邪険に振り払い、わざとらしい咳払いを二、三度してから宿屋へ向かう途中の武器屋へと足を向けた。

その時から、既に紫苑の顔は緩んでいたのである。



「……にしても、そのカッコ似合ってるな」

ザツクの褒め言葉に、紫苑は既に何度も眺めている自分の服装を、改めて見た。

上半身は、クリーム色の肌触りのよいチュニックに、ゆったりとした黒の上着を着て、漆黒のフード付きマントを羽織っている。下半身は、茶色いズボンに、黒いブーツ。

今はさすがにベッドの上に靴のまま上がれるほどの度胸はないので、ブーツは脱いでいるが。マントも置いておけ、とアローデイスに言われて渋々脱ぐ。

だが、そんな気持ちも、剣を見ると吹き飛んでしまう。

#### 4章・【ザ・ファイア】？

「おおおおおおお！！」

和やかな空気は、一瞬にして崩された。

大気がうねるような地響きがし、次いでぐらぐらと大地が揺れた。天井に塗られた塗料が剥げ、紫苑達にはらばらと降り注ぐ。

「ひっ！」

喉を小さく鳴らしたのはリスラスだ。

ルナセルの後ろに回り込み、その服を掴んでブルブルと震えている。ザックは紫苑を庇うかのようにずいとそばに寄ってくると、辺りを警戒し始めた。

そんな中、依然として表情を崩さないのはアローデイスだ。

顔色一つ変えないポーカーフェイスぶりに、紫苑は感服した。

「どうやら……お出ましのようだな」

低くつぶやくとアローデイスは窓を開け放った。

表通りに面している窓は、町が混乱状態にあるのを教えてくれた。聞こえてくるのは、悲鳴。

紫苑が顔を覗かせると、通りを一方向に逃げ惑う人々の波ができていた。

そして人々が逃げてくる方向からは、轟音と、時折天を衝くのは――  
――巨大な火柱。

「迂闊に顔を出すな」

紫苑の額を、アローデイスのひんやりした手が押して、部屋の中に戻す。

「アローデイス……」

ザックが心配そうに尋ねるのを、アローデイスは素っ気なく答えた。

「間違いない。ルフィナだ」

リスラスの体の震えが更にひどくなる。

地響きはその重みを増し、だんだん近づいてくるかのようだった。アローデイスは一同をぐるりと見回した。

「【ザ・ファイア】だ。リスラスは【カード】化しろ」

リスラスはびくびくと頷いて、カードになった。

ルナセルが、床に落ちたそれを拾い上げ、紫苑に手渡した。

舞い遊ぶ小鳥と雄大なる古木に両手を広げて迎え入れる、少年の姿が描かれている。

紫苑がカードをズボンのポケットにしまったのを確認して、アローデイスは紫苑をじっと見つめた。

「行かないの？」

アローデイスは、紫苑の質問に答えない。  
静かに目を見据えながら、アローデイスは口を開いた。

「『使徒』との戦い方、覚えているな？」

それは、今朝、アローデイスがテントの中で教えてくれた事。紫苑は力強く頷いた。

「勿論」

その返事を聞いて、アローデイスは満足そうにに微笑んだ。

「行くぞ……。我等が同胞を、この手で救い出す為に」

誓いともとれるアローデイスの言葉に、ザックとルナセル、紫苑は無言で同意の意を示した。暗黙の了解で、アローデイスを先頭に、一同は混乱の中へ躍り出たのだった。

#### 4章・【ザ・ファイア】？

外へ一步出た途端、紫苑達を襲ったのは、全てを巻き込んで路地を吹き抜ける熱風。

その風には、火の粉が混じっているのだろう。

空気に触れた肌が、チリチリと焦がされる。

周りの景色が赤みを帯びて見え、辺りの建物よりも遥かに高い火柱が上がる度押し寄せる爆風は、瞳を溶かしてしまうかと思うほどの熱量を含んでいた。

「うあっち！」

火の粉が火種となり燃えだした看板が、ルナセルのすぐそばに落ちてきた。

看板はめらめらと、揺らぐ炎を上げながら、ほんの少しの間で炭になってしまった。

「【ヘル・ファイア】か！！」

ザックが降り注ぐ火の粉から目を守ろうと、手で顔を覆い隠しながら空を仰いで叫んだ。

その動きにつられて、紫苑も上空を見上げる。

渦巻きながら、天へ昇る火柱は先ほどまでの赤色から、漆黑へと変わっていた。

「空が……黒い……」

つぶやいた言葉には、ルナセルが答えてくれた。

「【地獄の業火】だよ。ルフィナのアビリティだ」

ルナセルの顔が陰っている。

紫苑は嫌な予感が、胸の奥を横切っていくのを感じた。

黒くうごめく、何か。

冷静さが押し流されそうになるが、紫苑は必死に己を留めた。からの口を開いて、アローデイスに問いかけてみる。

「やっぱり、リラスと同じように……強くなってるの？」

「……ああ」

アローデイスは背を向けたまま答えた。

何かを凝視するように、一点を見据えていたアローデイスは、何の前触れもなく振り向いた。

「ルフィナは町の奥にいる模様だ。ザックは右手、ルナセルは左手、私と紫苑は正面だ」

「了解！」

「オッケー！」

それぞれから元気な返答が返ってきて、アローデイス名参謀は指令を発した。

「各自慎重に行動せよ。無茶はするな。では、武運を祈る……」  
「……散ー！」

ひゅーんと風が唸り、小さなつむじ風が二つできた。

紫苑は急に姿が見えなくなった二人に、キョロキョロと周囲を見回した。  
アローデイスの視線が自分に刺さっているのに気がついた。

#### 4章・【ザ・ファイア】？

「我々も行くぞ」

「うん……へえっ!!?」

急に目線が高くなった。

同時に体が持ち上げられているという認識。

アローデイスの右肩に、紫苑は軽々と抱え上げられている。

「ちよっ!!降ろしてっ!!」

紫苑はアローデイスの背中をバンバン叩いて抗議するが、全く痛がっている様子はない。

「では問うが、お前は屋根に飛び移りながら走れるか？」

「え……?無理……ですが」

「ならば仕方ない。大人しく荷物になっておけ」

無茶苦茶な理論で片づけられ、紫苑は更に強く背中を叩いた。

「いや、だから降ろしてっ!!……うわああ!!」

……飛翔。

アローデイスが強く地面を蹴り、高く高く飛び上がった。

町並みが、遙か眼下に広がる。五階立てビルの屋上から、町を見下ろしているような感じだ。アローデイスは、空中で一瞬だけ滞空す



ると、斜め下に落下していく。  
地上との距離がぐんぐん近づき、紫苑は下降の強風に煽られて目を閉じた。  
再び体が浮くような感覚が紫苑を襲い、前方から吹く風が顔を撫でて遙か後方に流れていく。恐る恐る目を開けると、アローデイスは本当に屋根の上を走っていた。

「……………」

紫苑はあまりの驚きに、口が聞けなくなっていた。  
アローデイスは屋根から屋根へ、前に横に斜めに走り、まるで雷になったようだ。

そして、だんだん近づいてくる漆黒の火柱。

近づくと、肌を焦がす熱気がじわじわと強くなる。

紫苑の額から、その熱気とは正反対の冷たい汗が流れた。

「……………ひどいな」

アローデイスが紫苑を肩から降ろした。

紫苑はアローデイスに掴まりながら、腰の剣がずり抜けないように気をつけて、地面に足を着けた。

どうやら、地上らしい。

石畳の感触が、ブーツを通して伝わってくる。

紫苑はそんな事は気にならなかった。

ただ、目の前の光景に目を奪われていたのだった。

町の最奥、他の建物より一回り大きな民家が、ごっごうと燃えていた。

石を積み上げて作られた外壁はその石が、炎の熱のせいで液体になって溶けだしていた。

さらさらしたマグマのような液体は、石畳の隙間を縫うように流れ、近くの木製の物を燃やしていく。

その業火の中に、一人の子供が立っていた。

炎に包まれていないのに、何ともないようだ。

その子は、炎の揺らめきで表情は見えないが、紫苑達に迫ってきているようだった。

#### 4章・【ザ・ファイア】？

「何や、逃げへん人間がおるなと思ったら……懐かしい顔やん」

その刹那、紫苑の背筋を、悪寒が走り抜けた。

あの、少女の声だ。

忘れる事なんて不可能であろう関西弁。

その声は楽しそうで、ほんの少しだけ含みがある。

そして明らかに、炎の中から聞こえてきたのだ。

「っ!!」

アローデイスの苦しげな吐息が耳元で聞こえて、紫苑は再び抱えられていた。

理解が追いつかないまま、景色が縮小される。

と、ほぼ同時に……。

どおおおん!!

大地が揺れ、空気が唸る。

今し方紫苑達が立っていた場所には、血よりも赤い、真紅の炎の壁があった。

間一髪とはまさにこの事。

紫苑は自分の前髪が数本焦げるのを感じた。

大通りを遮るようにそびえ立った火の壁は、その勢いを止めない。地下から湧き出しているかのように吹き出してくる。

「さすがは『三大使徒』やな。その兄ちゃん抱えてあんな動きできるなんて」

炎の壁の向こう側から、黒い影が透けて見える。

背丈からしてあの少女だろう。信じられない事だが、少女は炎の壁を歩きながら突き抜けてきた。

【火】を司る『使徒』だからだろうか、少女は勿論だが着ている服も焦げ目すらない。

微笑む少女の顔を、紫苑はこの時初めてじっくり見た。

背後で燃え上がる炎と同色の肩甲骨くらいまでの長さの髪をつなじで二つに結んでいる。

瞳は茶色、大きくぱっちりした二重まぶたで、きらきらと輝いている。

左目の下には、小さな泣きぼくろ。

肌はほんの少し日に焼けていて、全体的なイメージは男子の中に混じって遊ぶ、活発な女の子だ。

「お褒めに預かり光荣だ」

アローデイスは、顔の筋肉一つ動かない。

ルフィナは腰に手を当ててケタケタ笑う。

「相変わらずのトーヘンボクやなあ。まあ、アローデイスらしいっちゃらしいけどな」

唐変木の発音が、関西圏らしく妙に間延びしたイントネーションだった。

「でもなあ……」

明るい笑顔がフツと消え、静かな微笑みがルフィナを覆った。

「じきに笑われへんよーにしたるわ」

「くっ！」

アローデイスはくぐもった声を発すると、紫苑の腹をくの時に折り曲げて飛び上がった。

同時に炎の壁が崩れ、いくつもの炎の玉となり四方八方に飛び散る。アローデイスがふわりと舞い降りた先は、屋根の上。

二軒右隣の民家の屋根に立っていたザックが叫ぶ。

#### 4章・【ザ・ファイア】？

「おいっ！！アローデイス！どうするつもりだ！！？」

その反対側の屋根には、ルナセルが渋い顔をして立っているのが見えた。

「案ずるな、策はある」

アローデイスは、珍しく張りのある声で叫び返す。  
そして紫苑を見下ろした。

「紫苑……………」

その瞳は、燃え盛る炎のせいで赤々と輝いており、いつもとは違う強い光に、紫苑の心はつつかれたように跳ね上がった。

アローデイスの白い手が、紫苑の肩にそっとかかる。  
ギリシャ神話の彫刻のような彫りの深い整った顔が、ゆっくりと近づいてくる。

アローデイスの顔が、右耳の傍にきて、微かに囁いた。

「私を……………“背負え”」

『蒼穹の中、凜と輝く天の参謀あり。我が呼びかけに答え、同調せよ』  
シンクロ

目の前のアローデイスが、まばゆい光に包まれた。

光はどんどん視界を覆っていき、紫苑は自分も光を発している事に気がついた。

脳内を何かがぞくりと駆け抜けた。

流れ込む情報、言語、文字の羅列、数式。

その全てが物凄い速さで思考回路を駆け巡り、天使の輪のように円となり光を放つ。

飛んでいきそうになる自分の意識を何とかつなぎ止め、入り込んでくるアローデイスの意識にそっと手を差し伸べた。

目の前が爆発するかのように輝き、紫苑は目を瞑った。

「紫苑お兄ちゃん!!」

悲鳴にも近いルナセルの叫び声に目を開けると、光は消えていた。先ほどまでと何ら変わらない炎の中、ルフィナが紫苑を見上げている。

「兄ちゃん……アローデイスを“背負った”んか……」

呆然とつぶやくルフィナに、紫苑は自分の姿を眺めた。

蠟のように白い肌、目にかかる髪は透明に近い白だ。

着ている物も、アローデイスが着ていた少し灰色がかった色のロブ。

だが、手の形や目線の高さには変化がない。

紫苑のまんまのようだ。

これが、アローデイスが教えてくれた、『使徒』を自分の体に憑依させる技。

『何をぼんやりしているのだ』

脳内に直接アローデイスの声が響いた。

『我が肉体、我が意志はお前の物だ。お前が死ぬ時、私も同時に死ぬ……』

紫苑は腰に帯びた剣に手をかけた。

すらりと刀身を抜き放つと、刃の部分が炎の光を浴びて妖艶な色味を帯びていた。

アローデイスの声が、一層深みを増す。

『いざ、参ろう』

「っん」

紫苑はザックとルナセルに目配せすると、高く飛び上がりルフィナに向かって急降下した。



#### 4章・【ザ・ファイア】？

ひゅっゅっゅん！

耳元で風が唸り、旋風と化して紫苑を吹き下ろす。

見上げるルフィナの顔がクツと歪む。

紫苑が斬りかかるが、ルフィナは素早く背後に飛び退いた。だが紫苑も地面を強く蹴ってついて行く。

振り下ろした剣を、ルフィナの喉元めがけて振り上げる。

「おわっ！！！」

ルフィナはそれをバク宙でかわすと、空中でくるくると孤を描き、紫苑との距離を十分に保って着地した。

だが、剣の切っ先が触れていたのか、ルフィナの顎には赤い筋が斜めにはいり、つうと血が流れた。

ルフィナは自分の親指をぺろつと舐めて、傷口をなぞる。

「へえ……、やるやんか」

ルフィナはニヤリと笑った。

『紫苑！！五歩下がれ！！』

脳内に直接響いてきたアローデイスの声に、紫苑は素早く反応した。ルフィナはそれを見ると、怪しい笑みを浮かべる。

両手を前に突き出しながら大声で叫んだ。

「遅いっ！！！！【ヘル・ファイア】！！」

紫苑のすぐ目の前の石畳の隙間から、黒いものがせり上がってくるのが見えた。

それは漆黒の炎、全てを焼き尽くす業火。

紫苑は炎に呑み込まれると覚悟を決め、目を閉じようとした。景色が脳内でスロー再生に切り替わり、細くなっっていく瞳から見えるのは、地面から今にも勢いよく湧き出ようとする炎の頭だけ。  
だが――――。

『紫苑！目を開ける！』

アローデイスの叱咤が、紫苑にそれを思いとどまらせた。

必死にまぶたを持ち上げると、視界は真っ黒になりつつあった。

もうすぐで紫苑の体に触れてしまいそうなほど近くにある炎に、身がすくむ。

キュウウウウン！！

金属が加工されている時のような耳をつんざく音がして、同時に金色の何かが右から現れ、目の前を通っていった。

よく見ると、それは金に光り輝く火の玉だった。

それはとても巨大で、直径は紫苑の身長くらいある。

火の玉は【ヘル・ファイア】にぶつかり、紫苑が吹き飛ばされるかと思うほどの爆風をあげて相殺した。

「大丈夫か、紫苑！」

聞こえるのはザツクの声。

紫苑に駆け寄ってくると、右手を天に突き出し、叫んだ。

「【プロミネンス】！」

ザックの手のひらからほとばしったのは、ガス状の金の炎。  
ルフィナはそれを鼻先でかわすと、少し後ずさって様子を見るよう  
に上げていた両手を下げた。

#### 4章・【ザ・ファイア】？

その隙を見計らって、ザックは紫苑を背中に隠した。

体勢を整えたルフィナがザックに向かって来ようとするが、屋根の上からルナセルの呪文が降ってきた。

「【ミリアーネット】」

胸の前で組んだ手から光が放たれ、いく筋にも分岐した光は網のように拡散し、ルフィナを絡め取った。

「ちよっ！何やこれ！」

「【ミリアーネット】（流星の網）。僕のアビリティだよ」

ルナセルはふわりと地面に降り立つと、得意げな笑みを浮かべた。アローデイスの声が、紫苑に語りかける。

『早く呪文をかける』

「あ、うん！」

紫苑がルナセルに目配せをすると、ルナセルは察したように小さく頷いて、再び手を組み合わせる。

紫苑はアローデイスが送り込んできた無数の呪文の内、ルフィナにぴったりあう物を選んで詠唱した。

『紅蓮の揺らめき、全ての生を還す火よ。我が名に従い、服従せよ』

「【ヒーリング・スター】」

リスラスの時と同じような、薄水色の光がルフィナを覆った。

「うつ、ぐう……ああああ！」

ルフィナは苦しそうに頭を抑えている。

口からは言葉にならない声が漏れ、瞳は狂気の色を宿した。肩で荒く呼吸をし、はあはあと息が切れている。

ルフィナは悪魔に取り憑かれた獣のように悶えていた。

髪をかきむしり、何かを追い出そうとしているかのように自分の体を、近くの建物に打ちつけている。

ルナセルは傷だらけになっていくルフィナに、呪文の詠唱を止めて抱きついた。

「ルフィナ！しっかりしてよ！」

「がああああ！！！」

ルフィナは拘束された体を解放しようと、ルナセルを振り払おうとする。

しかしルナセルは、自分が何度壁に叩きつけられようが、ルフィナにしがみついていた。

「戻ってよ！ルフィナあ！！！」

「ぐ、ぐう……カハッ」

ルフィナが力尽きると同時に、彼女の口から、何か黒くもやもやした霧状の物質が、空气中に吐き出された。

それは、不意に吹いた一陣の風に流され、空気に馴染むように消え去ってしまった。

「アローデイス、今の……」

『説明は後。今は怪我人を安全な所へ移すのが先決だ』

「そう……だね」

紫苑が半ば無理矢理頷くと、アローデイスは紫苑の体から離れた。

一瞬で紫苑の体が元通りになる。

アローデイスは倒れたルフィナの頭を膝に乗せ、髪を優しく撫でているルナセルに何かを話しかけた。

ルナセルは頷く。

そして一同は宿へ戻ったのだった。

#### 4章・契約？

宿に戻った時には、壁にかけられた柱時計は、午前三時を差していた。

だが、クラスウッド火町は寝静まる気配はない。

ルフィナの出した炎はいまだに燃え続けており、その火の粉が風に巻き上げられて街の至る所の木製の物に引火したのだ。

それ故に町中で消火活動が行われている。

何故かその鎮火作業に志願したザック以外の三人は宿屋に戻っていた。

意識を失ったルフィナを彼女が泊まっていた部屋のベッドに寝かせると、リスラスが起きるまで看ていると申し出てくれた。紫苑、アローデイス、ルナセルの三人は部屋の外の廊下で立ち尽くしていた。

「……………ルフィナは、操られていたよ。絶対に」

しばらくの沈黙を破って、ルナセルは誰に言うともなく、まるでこぼれるかのようにつぶやいた。

そんなルナセルをアローデイスはひたと見つめた。

その顔には疲労の色が浮かんでいる。

「ああ、その様に見えたな」

それにしても……………と、アローデイスは眉間にシワを寄せた。瞳は飢えた狼のような光が、爛々と灯っている。

「あの煙」

紫苑は、ごくりと唾を呑み込んだ。

ルフィナの口から出てきた黒い煙。

煙は、ある香りを放っていた。それは人間の負の感情の匂い。恐怖、嫉妬、悲しみ、苛立ち、死――。

様々な感情がぐるぐると入り混じったその匂いが辺りに立ち込め、紫苑は吐き気がしたのを思い出した。

「うつうつ――――」

ふらりとアローデイスの体が揺れた。

前方に傾く体を、アローデイスは何とか支えた。

ルナセルが心配そうにアローデイスの服の裾を握った。

「……アローデイス」

「大丈夫だ」

アローデイスはルナセルの手をやりわりと振りほどく。

ルナセルは納得いかない顔をしながらも、大人しく手を離した。

「寝た方がいいよ」

紫苑がアローデイスを見上げて言う。

アローデイスは昨日から一睡もしていない。

その上、今日は紫苑に乗り移ったのだ。

消耗していないはずはない。

アローデイスは紫苑の提案を渋った。

それが明らかに表情に出る。

先ほどまでのポーカーフェイスは作り物だったというのがはっきりわかった。



「しかしだな。ルフィナがいつ目を覚ますかわからない」

「その……心配なら、いりませんよ」

#### 4章・契約？

かたりと部屋の扉が開き、中からはリスラスが出てきた。ほんわりと優しい笑みを浮かべている。

その笑顔はアローデイスを見つめていた。

「ルフィナはひどく疲れているようです。少なくとも明日の朝まで起きないでしょう」

紫苑はリスラスの言葉に微笑むと、改めてアローデイスを見た。

「だつてさー！」

「ふむ……」

アローデイスは仕方ないと言うように、小さくため息をつく。本当に素直じゃない。

「わかった、お言葉に甘えさせてもらうとしよう」

そう言うと、アローデイスは踵を返して自分達の部屋に入っていた。

紫苑も大きく伸びをした。

「僕も……寝ようかなあ」

あくびが出て、涙腺から涙が溢れる。

「紫苑お兄ちゃん」

「ん？」

ルナセルが紫苑を見上げる。

その瞳は真剣な色を帯びていた。

「ちょっと……いい？」

「うん、いいけど」

ルナセルはほつとしたような、だが少し躊躇いがちな顔をした。その表情は何かを含んでいるようだった。

紫苑も真剣な顔で聞いてみる。

「どうしたの？」

「紫苑お兄ちゃん！」

ルナセルはキツと紫苑を見据えた。

余りにも強い眼差しに、紫苑は後退りしそつになる。

そしてルナセルの口から出てきたのは、耳を疑うような事だった。

「僕と、“契約”してくれない？」

「“契約”？」

紫苑が聞き直すと、ルナセルはこくりと頷いた。

「“契約”っていうのは、僕と主従関係を結んで欲しいって事なんだ」

「しゅっ！主従関係！！？」

紫苑はぶんぶんと首を横に振った。

「そんなの無理だよ！僕は、そんな器じゃないし……」

「主従関係って言うっても、僕達の今の関係に変わりはないよ。でも、契約を結べば、紫苑お兄ちゃんにも僕のアビリティが使う事ができるようになるんだ」

「ルナセルのアビリティ？」

ルナセルはこくと頷いて、紫苑に向かって小指を立てた。  
指切りげんまんをする時のようだ。

「もしもOKなら、僕と同じようにして」

紫苑は恐る恐る小指を伸ばす。ルナセルはゆるりと指を絡めてきた。  
冷たい指だ。

紫苑のよりも明らかに短い。

すわりとじていて、少しでも力を入れたら容易く折れてしまいそうだ。

ルナセルは低くつぶやき始めた。

#### 4章・契約？

『我が名はルナセル。星の御名を冠する者なり。誓いは我が血よりも濃く、深淵なる闇より深い。――――永久に共に。どちらかの魂が尽きるまで』

繋いだ小指から、何かが流れ込んでくる感覚がした。

蜘蛛が尻から糸を吐くように、ルナセルの指から放出されるのは、情報という名の波。

放出という表現は、余り適切ではない。

正確に言うのであれば、ルナセルの体内を巡る情報が、紫苑の脳にコピーされているような。触れる指先が、チリチリと熱を持つ。

一分くらいで、ルナセルは絡めた指を解いた。

「紫苑お兄ちゃん、アローデイスに『使徒』を背負う方法を教えてもらったんでしょ？」

「そうだよ」

紫苑は頷く。

ルナセルは、補足説明なんだけど――――と、話し始めた。

「『使徒』を背負うと、シヨルダーは身体的な能力が上昇するんだ。でも、それだけじゃ未完成なんだよ。“契約”を交わした『使徒』を背負うと、そのアビリティまでもを操る事ができるようになる。“契約”を交わすという事は、魂を結ぶ事。より同調シンクロが深くなるって事なんだ」

――――シヨルダー。

紫苑は知らない単語が出てくるが、何故か意味がわかった。  
シヨルダー、背負う者。

『使徒』の体も、魂までもを。紫苑は胸に手を当てた。  
心の中、渦巻く感情の海を渡り、猛る本能の山を越えた先。  
胸の奥の静かな聖地である場所に、祀るように打ち付けられたルナセルという名の楔。

それは、ちよつとやさつとじゃ抜けないくらいに深く刺さっている。  
紫苑は拳を握った。

「僕は……強くなるよ。みんなを、この手で守れるくらい」  
ルナセルは無邪気な笑みを浮かべた。

先ほどまでの大人びた雰囲気はかき消され、いつものルナセルだ。

「紫苑お兄ちゃんならできる！僕は信じてるよ」

「あ……紫苑さん」

二人のやり取りを眺めていたリスラスが口を開いた。

「僕とも契約してくれませんか」

その口調は、今までのリスラスとは違う。  
はつきり自己主張ができる。  
慣れてくれたのだろうか、微笑む笑顔が柔らかい。  
紫苑は小指を出した。

「僕でよければ」

その指にリスラスは躊躇う事なく自分のを絡ませた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5188w/>

---

神々の使徒

2011年10月2日17時37分発行